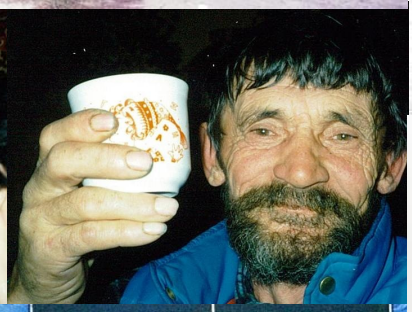
顔が見え、声が聞こえる交流を模索

ユーラシアンクラブ創設の二十年



ユーラシアンホットライン

ＮＰＯユーラシアンクラブ　新理事長に　江藤セデカさんが就任！！

―大野遼は退任し、活動をサポートする会長に、新理事の体制固まる―

日本人クラブから脱皮、ユーラシアンクラブ新時代に向けて第一歩

ＮＰＯユーラシアンクラブは、4 月に入り精力的に会合を重ね、日本橋、愛川町を拠点とし、情報通信ネットワークを拡充、日本人クラブから脱皮した新生ユーラシアンクラブを目指し、役員を改選した。新しいユーラシアンクラブの体制は下記のとおりです。また会費は年額１口6,000円でしたが、若い人を含め多くの方に参加していただくため、正会員１口3,000円、学生会員1,000円、賛同会員2,000円で１口以上のご協力をお願いすることになりました。ご理解よろしくお願いします。

新理事長　江藤　セデカ
副理事長　バーボルド
副理事長　浦川　治造
副理事長（新）　ナザファリン　ミールザーハリーリー
副理事長（兼事務局長）　井出　晃憲
理事　　井口　隆太郎
理事　　オコネシニコフ　ジミートリ
理事　　成宮　勇
理事　　山田　美奈
＜理事（以下新）＞
理事　　大塚　憲二
理事　　菅野　陽
理事　　斉藤　桂子
理事　　永田　眞一
理事　　森本　修平
理事　　矢部　誠
監事　　高橋　一夫
監事（新）田代　良子
監事（新）藤本　高義

新理事長の江藤セデカさんは、在日年数が母国アフガニスタン在住年数を上回るアフガニスタン人でもあります。年来の祖国の戦禍を憂い、ＮＰＯイーグル・アフガン復興協会を設立し女性や子供を中心としたアフガニスタン支援の活動を続けてきました。7月中旬国連大学で開催される「アフガニスタンに関する東京会合」でも重要な役割を果たしています。一方で、ユーラシアンクラブを通して諸民族の理解協力の活動に精力的に参加し、千葉県君津市のカムイミンタラや愛川サライの活動、東日本被災者支援の炊出しや慰問のコンサート等に積極的に参加し、クラブの活動を支えてきました。日本人クラブの脱皮、クラブの情報通信ネットワーク化、地域拠点型活動の推進という、私が数年来行ってきた提案に積極的に協力していただきました。

私はアフガニスタンやパキスタン、イランというペルシャ文化圏が果たしてきたアジアの文化史上の意義に鑑みさらに広い視野でアジアの中のユーラシアンクラブの活動を展開するうえで最適な人物として新理事長に推薦しました。

副理事長のバーボルドさんは、モンゴル文化基金を立ち上げ、就学条件に苦しむ子供たちを支援するために、在日のモンゴル人留学生とともに子供たちの修学資金を援助し、多くの子供たちの教育支援を行う一方、モンゴル文化を普及するため、3年連続モンゴル相撲学生チャンピオンであった経験を生かし、モンゴル・ブフ・クラブを組織、各地でモンゴル相撲を普及する活動を進め、板橋区で始まったモンゴル文化の祭典「ハワリンバヤル」祭を組織しこれまでかかわってきています。大相撲で活躍するモンゴル人力士の最大の支援者の一人です。十数年来ユーラシアンクラブの活動に参加し、千葉県君津市のカムイミンタラでは、東京アイヌ協会の浦川治造さんとともに「アジア相撲フェスタ」を立ち上げ、愛川町では「中津川モンゴルフェスティバル」を企画実施し、中華人民共和国東スニット旗から代表団を招へい、愛川町との友好都市に向けた足がかりを作っています。

私は、クラブ創設の当初から、アジアの諸民族特に少数民族や子供たちを視野に交流の絆を築くことを提案してきましたが、今後のユーラシアンクラブをリードすることを江藤セデカさんとバーボルドさんにお願いしました。お二人とも、安定感とアイデア、行動力いずれの面からみても優れた人で、しかも仲間からの信頼を得ています。

私、前理事長大野　遼は、理事として活動の一翼を担いながら、ユーラシアンクラブを代表し、活動への助言を行う会長に就任しました。

また、3年前から、ウズベキスタン・ＮＯＲＩＫＯ学級のガニシェル校長を仲介者として接触のあったロシア連邦アルタイ共和国の「アルタイ日本交流センター“金”」のパブラシェフ・エドワルド会長も総会に出席、今後ユーラシアンクラブを通してアルタイ共和国との文化交流を活性化することになり、パブラシェフ会長は、ユーラシアンクラブの名誉理事に就任しました。

次代に繋ぎたいユーラシアンクラブ

大野遼がユーラシアンクラブを構想し、立ち上げたのは、ペレストロイカで旧ソ連が崩壊したロシアや、改革開放政策の中国から日本への留学生が来日し始める時期を迎え、「アジア」の窓が開けた時期である。それまで、日本列島の人と文化の北方の系譜を探る「北方ユーラシア学会」（江上波夫会長）の理事・事務局長として、考古学、民族学、言語学、人類学の調査の進行をコーディネートしていたが、生きている人間の理解、親睦、交流の枠組みが必要だと考えるようになり、ロシア・沿海地方への視察ツアー、準備会の設置、そして1993年2月10日九段会館に少数民族代表団14人を招へいしての国際シンポジウムでユーラシアンクラブは創設された。団体の名称を「アジアンクラブ」とせず「ユーラシアンクラブ」としたのは、いずれ「アジアの時代」が来て、「アジア」を超えて国家民族宗教を超えた人間関係の枠組みが議論される時が来る、との考えからでした。

しかし、日本では、ユーラシア大陸、アジアの諸民族とりわけ少数民族・先住民族への理解が不足していることから、少数民族の自立支援の活動の前提としての「理解の促進」への考慮が必要となり、インターカレッジ文化講座「ユーラシアンフォーラム」や留学生とのフォーラム、少数民族村シカチアリャンの自立支援の活動などを展開しました。しかしこれは村への支持拡大にはつながりませんでした。日本人の間にはアジア諸民族への理解が圧倒的に不足し、発足当初仲介的パートナーであった現地地方政府関係者、アカデミー書記、少数民族村指導者との意識ギャップも活動を阻害しました。

15年ほど前からは、音楽を通した諸民族の理解促進にも取り組み、その総決算ともいうべき活動として2012年9月に日本・ウズベキスタン国交20周年記念音楽のシルクロードツアーを実施しました。

数年前から、地域拠点型活動の展開を掲げ、本部事務所を東京都中央区日本橋室町に移転すると共に、大野遼が住む愛川町に支部「愛川サライ」を立ち上げ、活動を拡げています。また「日本人クラブからの脱皮」「情報通信化」を議題に話し合いを続け、2012年6月に、江藤セデカ理事長、バーボルド副理事長を中軸とする、今後10年を見越した新しいユーラシアンクラブの執行部が誕生しました。

満20年を迎え2012年4月28日に開催される、ユーラシアンクラブ創設20周年の集いは、国家民族宗教を超えて、少数民族にウェートをおいて理解親睦協力を模索するユーラシアンクラブを次の世代に繋ぎ、アジアの絆として活動する団体となることを願って開催されます。

新理事長の江藤セデカは、在日年数が母国アフガニスタン在住年数を上回るアフガニスタン人でもあります。年来の祖国の戦禍を憂い、ＮＰＯ法人イーグル・アフガン復興協会を設立し女性や子供を中心としたアフガニスタン支援の活動を続けてきました。

副理事長のバー・ボルドは、モンゴル子ども文化基金を立ち上げ、子供たちの修学資金援助を行う一方、3年連続モンゴル相撲学生チャンピオンであった経験を生かし、モンゴル・ブフ・クラブを主宰、大相撲で活躍するモンゴル人力士の支援者、在日モンゴル人のリーダー的存在です。大相撲の幕内力士蒼国来氏を支援し、八百長問題での解雇無効判決を引き出した。

アジアの基層文化形成に大きな影響を与えたペルシャやモンゴルの文化を軸としたアジアの絆形成を視野に入れた新しいユーラシアンクラブの展望を皆様と共有いたしたいと思います。

以下、ユーラシアンクラブ創設の20年を振り返り、今後の活動の基盤にしたいと思います

2013年2月

特定非営利活動法人ユーラシアンクラブ　会長　大野　遼
理事長　江藤　セデカ
副理事長　バー・ボルド（富川　力道）

【ユーラシアンクラブ創設の前史】

ユーラシアンクラブ創設に先立って私は10年ほど、日本列島の人と文化の成り立ちについて調査研究する北方ユーラシア学会（故江上波夫会長）の理事・事務局長として、アルタイ山脈のスキタイ（パジリク）文化の凍結墓の発掘調査や旧石器時代の遺跡調査、バイカル湖周辺からシベリア各地の人類学調査、沿海地方の少数民族調査、奈良・平安時代に日本海を渡って大和朝廷と交流していた渤海使節が船出した港湾遺跡の発掘調査などさまざまな調査を組織していた。この学会を創設したメンバーは、当時の日本を代表する学術界の指導者ばかりで、私が北方ユーラシア学会からユーラシアンクラブ設立にシフトした後も、今でも応援を頂いている。私は、小学生の頃から、小舟で日本海を渡り大陸奥深くに立つという幻影がインプットされており、高校生の頃に、川越駅前の書店で手に取った加藤九祚先生のシベリアに憑かれた人々の本を知り、後に私が勤めていた大阪で、国立民族学博物館が設置され、そこに加藤九祚先生が赴任されたことを知ってから、人生が大きく旋回した。当時私は、メディアの記者として、日本の歴史学や文化財を取材し、メディアの記者たちに取材のノウハウを研修したりもしていたが、日本人の歴史理解が、国内的にも対外的にも南方の系譜に偏っていることを正さなくてはならないという気持ちを強く持っていた。そうした時、旧ソ連の中ではペレストロイカの波が寄せ、神戸に着岸したソ連船の中に、シベリアの少数民族関係者がおり、取材したり、国立民族学博物館に訪れるソ連の研究者と接触しているうちに、当時筑波大学の人類学系の責任者だった加藤晋平教授に面会し、「日本人の北方基層を探る会」を立ち上げ、加藤九祚、坪井清足、田中琢、松本秀雄、田中稔、大林太良ら学界の錚々たる人たちに交じって「北方ユーラシア学会」を創設した。私は加藤九祚先生、加藤晋平先生のお供をしながらノボシビルスクやアルタイ山脈に5年ほど通い、さまざまな調査に立ち会った。そして実現したのがアルタイ山脈のスキタイ（パジリク）文化の凍結王墓の発掘であった。この計画は、ゴルバチョフ書記長訪日の際には、日ソ政府間公文で「日ソ共同調査」として記載され、ウラジオストクからシベリア鉄道でコンテナ8本分の調査機材（大型トラック、バックフォー、冷凍コンテナ、写真機材一式ほか）を送り、調査機材の調達では、田中琢氏や樋口直正氏らの協力を得た。こうして100人余りの諸学会の研究者を現地に派遣し、旧ソ連崩壊の年8月、ゴルバチョフ氏が拉致される報道を聞きながら、発掘が行なわれた。私は並行して、渤海遺跡や日本海対岸の新石器遺跡、民族調査の実施のため、当時閉鎖されていたウラジオストクのソ連科学アカデミーシベリア支部代表とコンタクトし、坪井清足、荻原真子という錚々たる研究者とウラジオストクを訪問し、学術調査の協定書を結び、渤海港湾遺跡発掘、新石器時代の遺跡調査、民族調査などその後の調査進展につなげた。後に加藤九祚先生はウズベキスタンの仏教遺跡の発掘で、加藤晋平先生はチンギスハーンの陵墓を探すゴルバンゴル計画に入り目覚しい成果を上げた。

ユーラシアンクラブの構想は、私が文部省の記者クラブに詰めていた頃から脳裏にあったものだが、ユーラシア文化センターを設立する計画があり、メディアを退社した後、自力で立ち上げる形で、北方ユーラシア学会を通した学術交流とユーラシアンクラブの立ち上げは、並行して進めた。学会が、研究者同士の直接の交流が始まるのに合わせて、私は学会を少しずつ離れ、ユーラシアンクラブに専念することになった。

「いずれアジアの時代が訪れて、のちにユーラシアの時代が来る。国家の時代が終焉し、国家民族宗教を超えた人間関係の枠組みが役割を果たす時代に入った。既存の国家は全て、今では少数民族、先住民族と呼ばれている人々の歴史文化的恩恵を受けて今日がある。民族の共生、自然との共生を模索し、特に先住少数民族に敬意を払い、重視することが新しい価値観の基礎となる時が来た。ナショナリズムからの脱皮が必要だ。人類の古い殻を打ち破ろう」と考えてのことであった。

この考えを実行に移すために、日本列島ではアイヌ、アジア大陸では、日本列島に最も近い旧ソ連極東地域の先住少数民族との交流を視野に準備した。「隗より始めよ」といった気持ちで進めた第一歩であった。

【シカチアリャン村訪問からユーラシアンクラブ創設まで】

私は既にシベリアや極東の少数民族村を旧ソ連の時代から訪問していたが、クラスニーヤル村の次に初めて訪れたのはシカチアリャン村だった。

1991年11月の頃と思う。雪に閉ざされた真っ暗な村の一角から明かりが漏れていた。村役場兼村長室。20人余りの村民が狭い一室に集まり、軍人上がりの巨漢のロシア人村長を囲み、喧々囂々の議論の真っ最中であった。議論の内容は分らなかったが、ある者はアルコールの臭いをふりまいて、口角泡を飛ばす勢いで怒鳴り散らしている。村長は天を仰ぐような形だったと思う。旧ソ連崩壊直後の村の日常の風景と受け止めた。その後この村長とは何回か会い、村の産業発展の可能性や何故か村に一つしかない井戸の水質について語るのを聞いた。私は既に訪れていた沿海地方のクラスニーヤルと合わせ、日本海対岸の沿海地方、アムール流域の少数民族村を訪ね、村の自立と交流を促進する枠組みを模索する視察ツアーを実施することにした。ツアーの募集は日本経済新聞に掲載され、10数人が応じてきた。旧ソ連崩壊の翌年1992年9月、沿海地方クラスニーヤル村方面とアムール流域方面の二系統の少数民族村視察ツアーが実施された。樋口直正、井口隆太郎、荒井忠志、島村勝二ら視察ツアーに参加した二系統の参加者たちはハバロフスクで合流し、船でアムール川を下り、アムール川の岸辺からシカチアリャン村に上陸した。

ロシア連邦の極東で、最も大都市から近いシカチアリャン村は、今後の交流の拠点とするには最もふさわしいことを改めて確認。視察後、ハバロフスクに戻り、地方政府調査で行ったシンポジウムで「ユーラシアンクラブ」創設を提案、翌年１９９３年２月、ウラジオストク、クラスニーヤル、ハバロフスク、シカチアリャン、ブラバから先住民族村のリーダー、行政担当者ら１４人を招聘し、自立に役立つと思われる山形県の農協などを視察の後、１０日、九段会館で開催した国際シンポジウムで創設を決めた。

↓アルタイ山脈パジリク谷の王墓調査→豆満江河口の渤海港湾遺跡の発掘調査

ユーラシアンクラブ創設の第一期（1992年～2000年）新宿の小会議室確保まで

１９９２年
　９月　アムール河流域視察（設立準備）
　１０月　ユーラシアンクラブ設立準備会発足
　１１月　中古車１２台発送（ナナイ、ウリチ、ウデゲの民族村へ贈与）
　１２月　ユーラシアンクラブキャンプ取得（シカチアリャン）
１９９３年
　２月　シンポジウム開催、ユーラシアンクラブ創設（公益法人化を明記）
　　連絡用ＦＡＸを現地に設置（ウラジオストクほか５カ所）
　３月　民族村視察（シカチアリャンほか）
　　極東技術大学と少数民族村青年教育特別講座開設の協定書
　４月　キルギスタンにユーラシアンクラブ開設（拠点）。キャンプ取得
　５月　荒井幹事、山菜加工技術セミナー開催
　　ハバロフスク地方政府知事から人道援助の要請書
　６月　井口幹事、ウラジオストク視察
　　沿海地方政府知事から人道援助の要請書
　　北方ユーラシア学会第１回例会（オブザーバー参加）
　　会報「ユーラシアホットライン」創刊
　７月　環日本海経済交流協議会に民族文化センターで働きかけ
　　民族誌映像を見る会スタート
　８月　荒井幹事、極東視察（キノコ関連技術セミナーの可能性視察、沿海州）
　　要請を受けてクラブキャンプ補修（シカチアリャン）
　　民族誌映像を見る会「アイヌの熊祭りと他の民族の熊祭りを比較する」
　９月　姉妹団体「北方ユーラシア学会」のペトログリフ調査協力（ウスリー河、アムール河流域）
　　ユーラシアンクラブ現地オフィス取得（ハバロフスク）
　　民族村の青年５人極東技術大学へ入学
　　民族誌映像を見る会「シベリアの少数民族のシャーマニズム」
　１０月　中古車、布地（東林氏提供）、文房具など援助品を極東に発送
　　外務省の「日本ロシア極東交流協議会」に加入
　　北方ユーラシア学会第２回例会（オブザーバー参加）
　　民族誌映像を見る会「ブリヤートの文化」
　　山形で幹事会（発起人会設立より１年間の総括）
　１１月　日本ロシア極東知事会議開催－正式参加・傍聴
　　「ユーラシアンクラブの設立は日露交流の大きな成果の一つ」と評価（ハバロフスク地方知事）
　　民族誌映像を見る会「極東ロシアとサハリンの先住民族の歴史と現況」
　　北方ユーラシア学会理事会にて、ユーラシアンクラブを姉妹団体と確認
　１２月　伝統工芸講習３カ月コーススタート。８人入学
　　民族誌映像を見る会「フィン・ウゴル系の諸民族」
　　北方ユーラシア学会第３回例会
１９９４年
　１月　大野代表、チュクチ民族村視察、ユーラシアンクラブ開設
　２月　ユーラシアンクラブ／ロシア極東幹事会開催。
　　極東クラブの法人化、伝統産業取引所開設の方針を確認
　　ハバロフスクの現地幹事（ナナイ人ウザ・グリゴーリ）の活動開始
　　民族誌映像を見る会「エヴェンキ　タイガの遊牧民」
　３月　民族誌映像を見る会「サハの口琴」
　４月　グループ別幹事方式を決定
　　民族誌映像を見る会「復元されたアイヌ映像」
　　会報「ユーラシアホットライン」第２号発行
　５月　山菜加工セミナー
　　民族誌映像を見る会「アラスカ　ユピック・エスキモー」
　６月　民族誌映像を見る会「チベット仏教　２つのモンラム祭」
　７月　民族誌映像を見る会「カザフスタン　復権するステップ遊牧僕文化」
　８月　ロシア極東地方クラブ幹事を招請、合同幹事会。続いて飯豊町、小国町表敬訪問
　　会報「ユーラシアホットライン」第３号発行
　　民族誌映像を見る会「シベリアの極小諸民族」
　９月　姉妹団体、渤海遺跡調査
　　親睦旅行（中央アジア）
　　民族誌映像を見る会「バルトの民族と英国の民族」
　１０月　パソコン通信会議室開設（Nifty Serve）
　　民族誌映像を見る会「トゥーヴァ　チュルク民族とモンゴル文化の接点」
　１１月　日露極東知事会議に参加、飯豊町と姉妹村促進で協議
　　民族村幹事の要請により中古ミシンの寄贈活動を開始
　　会報「ユーラシアホットライン」第４号発行
　　民族誌映像を見る会「カナダ　イグルーリック・イヌイト」
　１２月　第１陣２６台のミシンを船便送付（シカチアリャンほか）
　　北方ユーラシア学会の学術調査団と現地訪問協力（沿海地方）
　　民族誌映像を見る会「舟 ①」
　　クラブ忘年会（総会・親睦会）
１９９５年
　１月　北方ユーラシア学会、東大、一橋大、千葉大、早大、國学院大、国士館大、創価大と協力、
　　インターカレッジ文化教養講座計画確定
　　民族誌映像を見る会「サミ　過去と現在」
　２月　ウラジオストクの代理人とインターネット通信開始
　３月　第１回記念講演会「民族の共生、自然との共生」（早稲田大学国際会議場）
　　講師：田中克彦、大林太良、松本秀雄
　　民族誌映像を見る会「サハの文化」
　４月　インターカレッジ文化講座スタート（☆）（国立教育会館）
　　社団法人東京倶楽部の助成決定
　　☆林俊雄、川又正智、佐々木史郎 …… ４月のテーマ「歩く」
　５月　☆加藤九祚、吉田集而、山田吾郎 …… ５月のテーマ「食べる」
　　山形県飯豊町の使節団とクラスニーヤル村を訪問
　　民族誌映像を見る会「タイミール半島の自然と人々」
　６月　☆伊東一郎、荻原真子、大林太良 …… ６月のテーマ「祀る」
　　郵政省国際ボランティア貯金の助成金支給決定（２事業対象）
　　会報「ユーラシアホットライン」第５号発行
　　民族誌映像を見る会「モンゴル人民共和国の時代の映像から」
　７月　クラブ親睦会
　　民族誌映像を見る会「ツングースと呼ばれた人々」
　８月　山菜加工技術指導、手工芸品技術指導のため専門家派遣(ボランティア貯金助成事業)
　　中古ミシン４０台搬送（シカチアリャンほか村興し）
　　親睦旅行（沿海地方）
　　民族誌映像を見る会「バイカル湖　シベリアの環境問題」
　９月　親睦旅行（中央アジア）
　　民族誌映像を見る会「ユーラシアの口琴を巡って」
　１０月　後期講座スタート
　　☆加藤定子、矢島叡、村澤博人 …… １０月のテーマ「着る」
　　民族誌映像を見る会「ダゲスタンの人々と工芸」
　１１月　アイヌ文化フォーラム（１８、２５日）
　　☆浅川欣男、渡辺仁、大貫静夫 …… １１月のテーマ「住む」
　　会報「ユーラシアホットライン」第６号発行
　　民族誌映像を見る会「カナダの先住民族問題を考える」
　１２月　アイヌ文化フォーラム（２～３日、山荘ポロチセ訪問）
　　☆風間伸次郎、中川裕、金子亨 …… １２月のテーマ「話す」
　　民族誌映像を見る会「中央アジアの楽器と音楽」
　　富山県の会員がシカチアリャン村の女性３人を招聘（東林氏、手工芸品技術研修）
　　ニブヒ代表招聘
　　クラブ忘年会（総会・親睦会）
１９９６年
　１月　民族村親睦旅行（沿海州）
　　民族誌映像を見る会「熊送りを巡って」
　２月　民族誌映像を見る会「中国の映像人類学」
　３月　シカチアリャン村訪問
　　会報「ユーラシアホットライン」第７号発行
　　第２回記念講演会「民族の海：ユーラシアの喜びと悲しみ－１９世紀と２１世紀の間」
　　講師：加藤九祚、田村晃一、荻原真子
　　民族誌映像を見る会「旧ソ連の異民族　コーリョーサラム」
　４月　文化講座スタート 通年テーマ“民族の海”
　　☆加藤晋平、白井久也、中本信幸 …… ４月のテーマ「シベリアの真珠バイカル」
　５月　縫製産業育成専門家４人がシカチアリャン村を訪問、作業ラインを構築
　　山形県飯豊町がクラスニーヤル村の孤師３人を招聘
　　☆佐々木利和、小嶋芳孝、原曜之 …… ５月のテーマ「モンガボ・アムールの旅」
　　ツングース語講座（風間伸次郎講師）
　６月　飯豊町の山菜加工専門家４人がクラスニーヤル村を訪問、技術指導
　　キルギスタンの幹事（映画監督・カリジン・アクマタリエフ）招聘（国際交流基金）
　　クラブ創設幹事会（本会が、将来の公益法人における理事会であるとの位置づけを確認）
　　☆高倉浩樹、藤代節、ニコライ・バラムィギン …… ６月のテーマ「大河回廊レナ」
　７月　クラブ親睦会
　８月　親睦旅行（沿海州）
　　親睦旅行（中央アジア）
　　会報「ユーラシアホットライン」第８号発行
　９月　親睦旅行（アムール河流域）
　　縫製技術セミナー
　　北方ユーラシア学会の渤海遺跡調査協力
　１０月　後期文化講座スタート
　　☆林俊雄、岡田英弘、小長谷有紀 …… １０月のテーマ「ユーラシア１万キロ」
　　公益法人設立趣意書作成
　　秋の温泉旅行、雪室（グリーンファーム）見学：小出郷・湯之谷村
　１１月　「在日ユーラシア人の会」準備会スタート
　　アイヌ文化フォーラム（高橋規講師）
　　駿馬民族誌映像を見る会（講師:林俊雄、工藤充）
　　☆本郷民男、小松久男、宇藤千枝子 …… １１月のテーマ「“神々”の交替」
　１２月　在日ユーラシア人の会設立
　　☆金子亨、志茂碩敏、田中克彦 …… １２月のテーマ「草原の民－流転と興亡」
　　コラ・ベルディＣＤ「白き島」制作
　　会報「ユーラシアホットライン」第９号発行
　　クラブ忘年会（総会・親睦会）
１９９７年
　１月　シカチアリャン村視察（手工芸品製造等）
　　ロシア極東地区幹事会（北方少数民族コミュニケーションウィーク合意）
　　シカチアリャン民族文化センター建設への協力をロシア国家北方委員会ハバロフスク支部長に依頼
　　在日ユーラシア人の会第１回ミーティング
　２月　民族料理を食べる会（セシオン杉並）
　３月　ユーラシア・ティーパーティ（東京芸術劇場）
　　キルギス留学生湯之谷村・小出町でホームステイ（１人）
　４月　文化講座スタート 通年テーマ“ユーラシアの風”
　　☆赤澤猛、宝来聰、山口敏 …… ４月のテーマ「人類の形成」
　　バザール参加（湯島聖堂）
　５月　シカチアリャン村小学校、幼稚園に文具、遊具寄贈
　　“稲作&温泉 in 湯之谷”ツアー（新潟県小出町、湯之谷村）
　　クラブ幹事会（９６年度事業・会計報告）
　　☆井上紘一、金子亨、直川礼緒 …… ５月のテーマ「民族の形成」
　　バザール参加
　６月　バザール参加
　　☆谷本一之、藤井知昭 …… ６月のテーマ「芸能と音」
　　映画「大シルクロード」試写会（日本映画学校）
　７月　クラブ親睦会
　　☆田中哲二講座　「中央アジアの親日国キルギス」
　　ユーラシア・コミュニケーション・フェス（新潟・小出郷文化会館）
　８月　親睦旅行（中央アジア）
　９月　親睦旅行（沿海州）
　　北方ユーラシア学会による渤海調査協力
　　“稲刈&温泉 in 湯之谷”ツアー（新潟県小出町、湯之谷村）
　１０月　後期文化講座スタート
　　☆岡内三眞、藤本強、林本哲 …… １０月のテーマ「歴史探訪」
　　バザール参加
　　会報「ユーラシアホットライン」第１０号発行
　１１月　シンポジウム「古代の海を渡ったユーラシアの風－現代の渤海船を派遣しよう」
　　☆橋宁、石塚猛、池田憲彦 …… １１月のテーマ「自然との共生」
　　第１回ユーラシアンフォーラム（懇談会）
　　ユーラシアンフォーラム（月刊ニュースレター）創刊
　１２月　アイヌ文化フォーラム（アイヌ文化交流センター、高橋規講師）
　　☆安田憲彦、佐藤洋一郎、阪本寧男 …… １２月のテーマ「農耕の起源」
　　第２回ユーラシアンフォーラム（懇談会）
　　クラブ忘年会（総会・親睦会）
１９９８年
　１月　シカチアリャン村視察（手工芸品製造等）、学用品寄贈
　　ビシュケク第一中学校に学用品等寄贈
　　ユーラシアフォーラム：キルギス学校寄付報告等
　２月　民族料理を食べる会（セシオン杉並）
　　舞台芸術フェアにブース出展、“ユーラシア芸能祭実行委員会”呼掛け
　３月　ユーラシアンフォーラム（ジュカ:キルギスの文化、日本の文化）
　　留学生５名、湯之谷村・小出町でホームステイ
　　（サハ２名、キルギス１名）
　４月　文化講座スタート 通年テーマ“国家、民族、宗教を超えて”
　　☆岩間典夫、辺真一、高橋義夫 …… ４月のテーマ「民族と国家の狭間」
　　会報・ニュースレターの紙名交換（ニュースレターを「ホットライン」とする）
　　ユーラシアンフォーラム・ｱﾝﾄﾞﾚｲ&ﾅﾀｰﾘｬ：日本語とサハ語、他
　　会報「ユーラシアンフォーラム」第１１号発行
　５月　シカチアリャン村小学校、幼稚園に文具、遊具寄贈
　　会報「ユーラシアフォーラム(旧ﾕｰﾗｼｱﾝﾈｯﾄﾜｰｸ)」第１１号発行
　　☆服部英二、杉山正明、坂本勉 …… ５月のテーマ「ユーラシアの潮流」
　　ユーラシアンフォーラム・岩間典夫：オロチョン人として生きて
　　寺沢上人：クルド支援活動
　　ﾓﾄﾞﾊﾞｶﾞｼﾞｺｱ･ﾗｽﾍﾟｸﾄ:中央ｱｼﾞｱの国際関係－政治経済等
　６月　☆吉田世津子、山下宗久、小野智香子 …… ６月のテーマ「フィールドレポート」
　　クラブ幹事会（９７年度事業・会計報告）
　　ユーラシアンフォーラム・ｶﾖｼｭﾍﾟﾀｰｵﾙｶﾞｺｱ:キルギスの国際関係
　　ｻﾞﾋﾄﾞﾌ･ﾙｶﾞﾌｧｰﾙ:ｸｽﾞﾍﾞｷｽﾀﾝについて
　７月　クラブ親睦会
　　ユーラシアンフォーラム：ｼｮﾏﾉﾌ･ｱｽｶｰﾙｶﾞﾌｽﾀﾝの経済
　　ユーラシア・コミュニケーション・フェス（新潟・小出郷文化会館）
　８月　親睦旅行（中央アジア）
　　親睦旅行（沿海州）
　９月　サハ、タジク、キルギス留学生（計４名）送別会・蜂蜜パーティ
　　留学生１名、富山市でホームステイ（サハ）
　１０月　後期文化講座スタート
　　☆森安孝夫、片山章雄、宇田川洋 …… １０月のテーマ「ユーラシアの古代文字」
　　“紅葉&温泉&ミーティング in 湯之谷”（新潟県小出町、湯之谷村）
　　ユーラシアンフォーラム・ｱﾅｽﾀｰﾄﾁﾞｱ･ｵｷﾞｶﾞﾞ:ｻﾊの外交等
　　会報「ユーラシアフォーラム」第１２号発行
　１１月　☆林俊雄、吉田豊 …… １１月のテーマ「歴史を作った人々」
　　杉山正明講師分３月に延期
　　ユーラシアンフォーラム・ｳｽﾏﾉﾌ･ﾌｧﾙｰﾌ:ｳﾐﾄﾞ基金
　　ｻﾞﾋﾄﾞﾌ･ｼｪﾙｶﾞｯﾄﾞ:国際関係～ｳｽﾞﾍﾞｸを中心に
　１２月　☆堀晄、大貫静夫、谷一尚 …… １２月のテーマ「フィールドレポート」
　　ユーラシアンフォーラム・ｲﾘｰﾅ･ﾃｨｼｪﾅ:サハの伝統的祝日
　　ﾋﾞﾝｶﾞ:モンゴル子供基金
　　赤城山麓サッカー親善試合（群馬県）
　　クラブ忘年会（総会・親睦会）
１９９９年
　１月　シカチアリャン村ほか沿海州視察（手工芸品製造等）
　　群馬ＴＶ出演（大野、後藤）
　　会報「ユーラシアフォーラム」第１３号発行
　２月　リスペク送別会
　　モンゴル映画上映“四季『遊牧』～ツェルゲルの人々”
　　（オリンピック記念青少年総合センター）
　３月　ユーラシアンフォーラム
　　☆文化講座・杉山正明講師“マルコ・ポーロの謎”(98.11の振替)
　４月　文化講座スタート 通年テーマ“国家、民族、宗教を超えて”
　　☆岡田明憲、井本英一、前田耕作 …… 「ゾロアスター(教)の誕生と背景」
　　－前橋会場とＴＶ中継－
　５月　☆岡田明憲 …… ５月のテーマ「ゾロアスター教と世界宗教」
　　写真展「ユーラシア源流～“遊牧民”のくらしと文化展」
　６月　☆岡田明憲 …… ６月のテーマ「古代日本とゾロアスター教」
　　Raipon(ロシア北方少数民族協会)懇談会
　７月　留学生会議準備会（伊豆）
　　ユーラシア・コミュニケーション・フェス（新潟・小出郷文化会館）
　　留学生１名、富山市でホームステイ（サハ）
　８月　親睦旅行（沿海州）
　　親睦旅行（中央アジア）、キルギス第一寄宿舎学校日本語科に教科書、ビデオテレビ寄贈
　９月　サハ、タジク、キルギス留学生（計４名）送別会、富士山登山
　１０月　☆楠　賢道 …… １０月のテーマ「中国新疆ウイグル自治区の満州族“シボ族”」
　　“紅葉&温泉&ミーティング in 湯之谷”（新潟県小出町、湯之谷村）
　１１月　☆ﾊﾞﾄﾞﾏ・ｱﾙﾙｶﾌﾉﾌ …… １１月のテーマ「ロシアのモンゴル国“カルムィック”」
　　クラブ幹事会（９８年度事業・会計報告）
　１２月　☆松村一登 …… １２月のテーマ「ウラル系の少数民族マリ人」
　　武蔵大学公開講座“中央アジアの新提点－ウズベキスタン今と昔”に企画協力
　　クラブ忘年会（総会・親睦会）
２０００年
　１月　新年会
　　☆鈴木　薫 … １月のテーマ「ユーラシア再発見･忘れられた超大国－オスマントルコ」
　２月　☆前田耕作 … ２月のテーマ「生活文化編・飛天の系譜－天使、ドラゴン、鹿、英雄」
　　小会議室開室(東京都渋谷区)

ユーラシアンクラブ創設の第一期（１９９３年～2000年）小会議室確保まで

【総括Ⅰ　少数民族村の産業自立支援に取り組む】

日本海対岸の先住少数民族村の経済的自立支援はクラブ設立当初の最大の課題の一つであった。ハバロフスク文化局、先住少数民族村からは観光や地場産業の振興の要望が強くだされていた。自立支援・産業技術協力では（中古車、ＦＡＸ贈与、活動キャンプ、オフィスの取得、中古ミシン、布地の贈与、乾燥パッキング機械提供、研修、ミシン工場設置整備、姉妹村促進、）に取り組んだ→　日本側；少数民族村への理解不足、ロシア側；代理人（文化局次長、学術機関元書記、少数民族協会リーダー）によるキャンプ・オフィス・中古車の私的流用・剽窃、少数民族村リーダーの理解不足、裁判３回；少数民族村側からの働きかけでキャンプの所有権が大野に戻るのに10年以上かかる／2001年5月。最後はテレビ局の取材ヘリ同乗が契機となり現地での活動は挫折した。

【モノローグ】

それまで日本人の歴史意識の中ですっぽり抜け落ちていた「北方の視点」を活性化するべく、「アルタイ・シベリア歴史文明展」を開催したり、日ソ交換公文に基づく「パジリク王墓発掘プロジェクト」、旧ソ連と北朝鮮国境を流れる豆満江河口にある渤海港湾遺跡の発掘、沿海地方狩猟文化の調査などを北方ユーラシア学会を通して組織し活動していた。しかし「アジアの時代」が来ることを想定し「ユーラシアンクラブ」の創設を提案したのが1992年。日本海対岸の「沿海地方」は「ユーラシアの窓」だから。限りなく先住・少数民族に敬意を表する国家・民族・宗教を超えた理解親睦協力の枠組みを志向して活動はスタートした。「模索」はしかし、あまりにも隔絶した交通手段のない少数民族村の人との接点を維持することに難渋し、中古車やＦＡＸ器械を現地に届けることから始まりました。また現地の拠点としてウラジオストクやハバロフスク、そして大都市から最も近い民族村シカチアリャンに、アパート２軒やキャンプ用地を取得し現地代理人に管理を委託しましたが、パートナーであるはずの少数民族村との間を仲介する現地政府のリーダーN.R.、学会指導者M.P.、現地少数民族団体リーダーが私物化略取し挫折。クラブ創設者として幹事をお願いした荒井忠志さんは、山菜加工セミナーを現地で開催し、沿海地方の猟師を山形県飯豊町に招聘しゼンマイ加工を指導。最終的にはパッキングの機械を猟師組合に贈与し、現地産のゼンマイが商品化された。富山県の東林勉さん（故人）は、自社が制作するカーテン生地の端切れを小物製造の原料として無料提供するとともに、シカチアリャン村から3人の女性を３ヶ月受け入れ縫製技術の研修を行い、キャンプ地に工場ラインを立ち上げ、小物の生産が始まった。しかしゼンマイはウラジオストクでパッケージ販売されたものの、縫製品は販路開拓等が難渋し、キャンプの運営も上記事情でうまくいかず挫折、贈与された中古ミシンは村の無職女性に提供され、民芸品の加工等に使用されることになった。しかしキャンプの運営管理が不安定で、現地政府のリーダーによって私物化されていたキャンプの所有権を住民７７人に分筆移転していたが村や現地政府の協力を得られず、購入資金を提供した大野に返却する希望が住民の間から上がり、数年間に渡る裁判の結果2001年所有権が大野に移転された。その使用方法を、住民の自立的活動で検討することを提案し、大豆栽培、岩絵を活用した積極的観光振興、青少年の活動センター等を提案して活動を始めた矢先、テレビ局の取材許可に問題が発生し、FSV（旧KGB）が介入、違法な情報提供を拒否したところ入国拒否にあった。サハ共和国大統領から国民栄誉賞を受賞したばかりで、ロシアへの入国拒否という不本意な状況が続いている。現在は、日本で出来る活動に切り替え「３００人の村の古代絵画展」を来年開催する方向で準備を続けている。キャンプ地等は、シカチアリャン村及び住民代表に贈与する方向で準備している。開発に伴う河川の汚染はアムール川も例外ではなく、深刻な変形魚がこの１５年ほど問題になっている。アムール漁労は破壊され、私の多くの友人が漁から撤退し、都市労働者に転身後トラブルに巻き込まれ亡くなった人もいる。栄養状態の悪い人も多く、若くして亡くなる村民が多い。若者が元気になれる村づくりの夢は捨てていない。日本でできることを模索したい。

【少数民族村の経済的自立支援はなぜ挫折したか】

①第一は受け入れ側が不安定だったこと；支援物資（中古車、ＦＡＸ、中古ミシン）、拠点施設（オフィス、キャンプ等）を地元の第三者的代理人が私的流用・剽窃し運営が不能になったことが第一番の要因。

②第二は成果（ゼンマイの乾燥加工技術を生かしたパック販売）の結果を日本側に通知しなかったことに見られるように日本側の援助への適切な対応がないなどの倫理原則を欠いたこと（山形県飯豊町では議会が姉妹村に同意）

③2000年代初頭まで村の自治が機能しておらず、任命制の町長が自立的決定を行なえず、姉妹村への対応ができなかったこと。また概して日本では少数民族村との交流パートナーを考慮することが希薄であること。

④せっかく始まったシカチアリャン村の製作販売も販路の開拓がうまくいかなかった。これは大野の個人的な力量も大きな敗因の一つと考えられる。

⑤少数民族村は交通不便な遠隔地にあり、情報通信（電話、ＦＡＸその他）が円滑ではなかったこと等がある。

⑥何よりも少数民族村の産業の自立支援を目指す活動を「日露交流の大きな成果の一つ」と知事は表明したが「政治的自立支援」と治安機関の若手職員が歪曲した上申書で入国が阻害されたことが一番大きな挫折要因である。

【第一期の活動の軌跡】（民族誌映像を見る会、インターカレッジ文化講座等を除く）

１９９２年
　９月　アムール河流域視察（設立準備）
　１０月　ユーラシアンクラブ設立準備会発足
　１１月　中古車１２台発送（ナナイ、ウリチ、ウデゲの民族村へ贈与）
　１２月　ユーラシアンクラブキャンプ取得（シカチアリャン）
１９９３年
　２月　シンポジウム開催、ユーラシアンクラブ創設（公益法人化を明記）
　　連絡用ＦＡＸを現地に設置（ウラジオストクほか５カ所）
　３月　民族村視察（シカチアリャンほか）
　　極東技術大学と少数民族村青年教育特別講座開設の協定書
　４月　キルギスタンにユーラシアンクラブ開設（拠点）。キャンプ取得
　５月　荒井幹事、山菜加工技術セミナー開催
　　ハバロフスク地方政府知事から人道援助の要請書
　６月　井口幹事、ウラジオストク視察
　　沿海地方政府知事から人道援助の要請書
　　会報「ユーラシアホットライン」創刊
　７月　環日本海経済交流協議会に民族文化センターで働きかけ
　８月　荒井幹事、極東視察（キノコ関連技術セミナーの可能性視察、沿海州）
　　要請を受けてクラブキャンプ補修（シカチアリャン）
　　ユーラシアンクラブ現地オフィス取得（ハバロフスク）
　　民族村の青年５人極東技術大学へ入学
　１０月　中古車、布地（東林氏提供）、文房具など援助品を極東に発送
　　外務省の「日本ロシア極東交流協議会」に加入
　　山形で幹事会（発起人会設立より１年間の総括）
　１１月　日本ロシア極東知事会議開催－正式参加・傍聴
　　「ユーラシアンクラブの設立は日露交流の大きな成果の一つ」と評価
　　（ハバロフスク地方知事）
　１２月　伝統工芸講習３カ月コーススタート。８人入学
１９９４年
　１月　大野代表、チュクチ民族村視察、ユーラシアンクラブ開設
　２月　ユーラシアンクラブ／ロシア極東幹事会開催。
　　極東クラブの法人化、伝統産業取引所開設の方針を確認
　　ハバロフスクの現地幹事（ナナイ人ウザ・グリゴーリ）の活動開始
　４月　グループ別幹事方式を決定
　　会報「ユーラシアホットライン」第２号発行
　５月　山菜加工セミナー
　８月　ロシア極東地方クラブ幹事を招請、合同幹事会。
　　続いて飯豊町、小国町表敬訪問
　　会報「ユーラシアホットライン」第３号発行
　９月　姉妹団体、渤海遺跡調査
　　親睦旅行（中央アジア）
　１０月　パソコン通信会議室開設（Nifty Serve）
　１１月　日露極東知事会議に参加、飯豊町と姉妹村促進で協議
　　民族村幹事の要請により中古ミシンの寄贈活動を開始
　　会報「ユーラシアホットライン」第４号発行
　１２月　第１陣２６台のミシンを船便送付（シカチアリャンほか）
　　クラブ忘年会（総会・親睦会）
１９９５年
　５月　山形県飯豊町の使節団とクラスニーヤル村を訪問
　６月　郵政省国際ボランティア貯金の助成金支給決定（２事業対象）
　　会報「ユーラシアホットライン」第５号発行
　７月　クラブ親睦会
　８月　山菜加工技術指導、手工芸品技術指導のため専門家派遣
　　(ボランティア貯金助成事業)
　　中古ミシン４０台搬送（シカチアリャンほか村興し）
　　親睦旅行（沿海地方）
　９月　親睦旅行（中央アジア）
　１１月　会報「ユーラシアホットライン」第６号発行
　１２月　富山県の会員がシカチアリャン村の女性３人を招聘
　　（東林氏、手工芸品技術研修）
　　ニブヒ代表招聘
　　クラブ忘年会（総会・親睦会）
１９９６年
　１月　民族村親睦旅行（沿海州）
　３月　シカチアリャン村訪問
　　会報「ユーラシアホットライン」第７号発行
　５月　縫製産業育成専門家４人がシカチアリャン村を訪問、作業ラインを構築
　　山形県飯豊町がクラスニーヤル村の猟師３人を招聘
　　ツングース語講座（風間伸次郎講師）
　６月　飯豊町の山菜加工専門家４人がクラスニーヤル村を訪問、技術指導
　　キルギスタンの幹事（映画監督・カリジン・アクマタリエフ）招聘
　　（国際交流基金）
　　クラブ創設幹事会
　　（本会が、将来の公益法人における理事会であるとの位置づけを確認）
　７月　クラブ親睦会
　８月　親睦旅行（沿海州）
　　親睦旅行（中央アジア）
　　会報「ユーラシアホットライン」第８号発行
　９月　親睦旅行（アムール河流域）
　　縫製技術セミナー
　１０月　公益法人設立趣意書作成
　　秋の温泉旅行、雪室（グリーンファーム）見学：小出郷・湯之谷村
　１１月　「在日ユーラシア人の会」準備会スタート
　１２月　在日ユーラシア人の会設立
　　コラ・ベルディＣＤ「白き島」制作
　　会報「ユーラシアホットライン」第９号発行
　　クラブ忘年会（総会・親睦会）
１９９７年
　１月　シカチアリャン村視察（手工芸品製造等）
　　ロシア極東地区幹事会（北方少数民族コミュニケーションウィーク合意）
　　シカチアリャン民族文化センター建設への協力を
　　ロシア国家北方委員会ハバロフスク支部長に依頼
　　在日ユーラシア人の会第１回ミーティング
　３月　ユーラシア・ティーパーティ（東京芸術劇場）
　　キルギス留学生湯之谷村・小出町でホームステイ（１人）
　５月　シカチアリャン村小学校、幼稚園に文具、遊具寄贈
　　“稲作＆温泉 in 湯之谷”ツアー（新潟県小出町、湯之谷村）
　　クラブ幹事会（９６年度事業・会計報告）
　６月　バザール参加　映画「大シルクロード」試写会（日本映画学校）
　７月　クラブ親睦会
　　ユーラシア・コミュニケーション・フェス（新潟・小出郷文化会館）
　８月　親睦旅行（中央アジア）
　９月　親睦旅行（沿海州）
　　“稲刈＆温泉 in 湯之谷”ツアー（新潟県小出町、湯之谷村）
　１０月　バザール参加
　　会報「ユーラシアホットライン」第１０号発行
　　第１回ユーラシアンフォーラム（懇談会）
　　ユーラシアンフォーラム（月刊ニュースレター）創刊
　１２月　第２回ユーラシアンフォーラム（懇談会）
　　クラブ忘年会（総会・親睦会）
１９９８年
　１月　シカチアリャン村視察（手工芸品製造等）、学用品寄贈
　　ビシュケク第一中学校に学用品等寄贈
　　ユーラシアフォーラム：キルギス学校寄付報告等
　２月　民族料理を食べる会（セシオン杉並）
　　舞台芸術フェアにブース出展、“ユーラシア芸能祭実行委員会”呼掛け
　３月　ユーラシアンフォーラム（ジカ:キルギスの文化、日本の文化）
　　留学生５名、湯之谷村・小出町でホームステイ
　　（サハ２名、キルギス１名）
　４月　会報・ニュースレターの紙名交換
　　（ニュースレターを「ホットライン」とする）
　　ユーラシアンフォーラム・ｱﾝﾄﾞﾚｲ&ﾅﾀｰﾘｬ：日本語とサハ語､他
　　会報「ユーラシアンフォーラム」第１１号発行
　５月　シカチアリャン村小学校、幼稚園に文具、遊具寄贈
　　ユーラシアンフォーラム・岩間典夫：オロチョン人として生きて
　　寺沢上人：クルド支援活動
　　ﾓﾛﾄﾞｶﾞｼﾞｴﾌ･ﾘｽﾍﾞｸ:中央ｱｼﾞｱの国際関係－政治経済等
　６月　クラブ幹事会（９７年度事業・会計報告）
　　ユーラシアンフォーラム・ｶﾑｼｭﾍﾞｸ･ｵﾑﾙｻﾞｺﾌ:キルギスの国際関係
　　ｻﾞﾋﾄﾞﾌ･ﾑｻﾞﾌｧｰﾙ:ｳｽﾞﾍﾞｷｽﾀﾝについて
　７月　クラブ親睦会
　　ユーラシアンフォーラム：ｼｮﾏﾉﾌ･ｱｽｶｰ:ｶｻﾞﾌｽﾀﾝの経済
　　ユーラシア・コミュニケーション・フェス（新潟・小出郷文化会館）
　８月　親睦旅行（中央アジア）
　　親睦旅行（沿海州）
　９月　サハ、タジク、キルギス留学生（計４名）送別会・蜂蜜パーティ
　　留学生１名、富山市でホームステイ（サハ）
　１０月　“紅葉＆温泉＆ミーティング in 湯之谷”（新潟県小出町、湯之谷村）

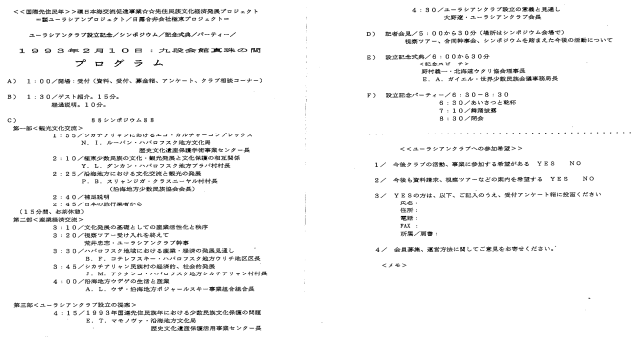
　　ユーラシアンフォーラム・ｱﾅｽﾀｰﾄｳﾞｧ･ｵﾘｶﾞ:ｻﾊの外交等
　　会報「ユーラシアフォーラム」第１２号発行
　１１月　ユーラシアンフォーラム・ｳｽﾏﾉﾌ･ﾌｧﾙｰﾌ:ｳﾑﾄﾞ基金
　　ｻﾞﾋﾄﾞﾌ･ｼｪﾙｿﾞｯﾄﾞ:国際関係～ｳｽﾞﾍﾞｸを中心に
　１２月　ユーラシアンフォーラム・ｲﾘｰﾅ･ﾃｨｼｪﾅ:サハの伝統的祝日
　　ﾋﾞﾚｸﾞ:モンゴル子供基金
　　赤城山麓サッカー親善試合（群馬県）
　　クラブ忘年会（総会・親睦会）

１９９９年
　１月　シカチアリャン村ほか沿海州視察（手工芸品製造等）
　　群馬ＴＶ出演（大野、後藤）
　　会報「ユーラシアフォーラム」第１３号発行
　２月　リスベク送別会
　　モンゴル映画上映“四季『遊牧』～ツェルゲルの人々”
　　（オリンピック記念青少年総合センター）
　３月　ユーラシアンフォーラム
　５月　写真展「ユーラシア源流～“遊牧民”のくらしと文化展」
　６月　Raipon(ロシア北方少数民族協会)懇談会
　７月　留学生会議準備会（伊豆）
　　ユーラシア・コミュニケーション・フェス（新潟・小出郷文化会館）
　　留学生１名、富山市でホームステイ（サハ）
　８月　親睦旅行（沿海州）
　　親睦旅行（中央アジア）、
　　キルギス第一寄宿舎学校日本語科に教科書、ビデオテレビ寄贈
　９月　サハ、タジク、キルギス留学生（計４名）送別会、富士山登山
　１０月　“紅葉＆温泉＆ミーティング in 湯之谷”（新潟県小出町、湯之谷村）
　１１月　クラブ幹事会（９８年度事業・会計報告）
　１２月　クラブ忘年会（総会・親睦会）
２０００年
　１月　新年会
　２月　小会議室開室(東京都渋谷区)

※　以上第一期の、黒字は極東少数民族支援の活動。キャンプやオフィスが代理人の私的流用で運営不能となり、活動が低下しているのがわかる。その一方で、留学生や新設大使館や総領事部を通した活動（緑字）増が、中央アジア、モンゴル、サハ等をテーマとしたフォーラムや親睦旅行の増加に反映されている。群馬での取り組みは「中央アジアユーラシアクラブ」の分離独立を産み、都内での活動の大きな障害となっている。

【私の夢と懺悔】下記の記事は「ユーラシアンホットライン第2号1994年5月20日付」に掲載されたものです。チュコト半島ウスチベラヤ村で厳冬２月に出会った人たちとユーラシアンクラブを作り、役に立ちたいと動いていました。いかにせん、当時はまだ今のような情報通信社会でなく、電話もＦＡＸも不通、現地に行くのも大変な時代でした。なんとかしようと思っていたが果たせなかった。人生は悔い残して終わるのかと切ない気持ちです。ボネさんごめん。

2


<<国際先住民年>>第5回本格交流準備会合先住民族文化継承発展プロジェクト
＝第ユーラシアンプロジェクト／日露合弁会社検索プロジェクト＝

ユーラシアンクラブ設立総会／シンポジウム／記念式典／パーティー／

１９９３年２月１０日：九段会館「高等学校の間」

プログラム

A） １：００／開場：受付（資料、受付、募金箱、アンケート、クラブ相談コーナー）

B） １：３０／ゲスト紹介。１５分。
挨拶説明。１０分。

C） ８８シンポジウム８８

第一部＜報先文化交流＞
１：５５／シンポジアリューシャンにおけるキーコ・ガルデーコ／ノックックへ
Ｎ．Ｉ．ルーパン・ハバロフスク地方文化庫
歴史文化遺産保護修復事業センター長
２：１０／極東少数民族の文化・報先民族と文化保護の相互関係
Ｔ．Ｌ．ドンスカ・ハバロフスク地方ブラ／村付長
２：２５／伝統地方における文化交流と報先の民族
Ｐ．Ｓ．メドゥシンダ・クラスニーヤ／村付長
（伝南地方少数民族協会会長）
３：４０／補足説明
Ｋ：４５／ロホの旅行画像から
（１５分間、総括休憩）
第二部＜産業経済交流＞
３：１０／文化発展の基礎としての産業倍性化と秩序
３：２０／視察ツアー受け入れを終えて
党非忠恕：ユーラシアンクラブ幹事
３：３０／ハバロフスク地域における産業・経済の発展見通し
Ｂ．Ｆ．コチレフスキー・ハバロフスク超方クリリ地区区長
３：４５／ロスケアリッツ民族村の組織的、社会的発展
Ｚ．Ｍ．ドゥチェンコ・ハバロフスク超方ビルケアリッツ村付長
４：００／伝南地方ケアリの生活と発展
Ａ．Ｌ．ウサ：伝南地方ボジャールスキー事業組合統合長

第三部＜ユーラシアンクラブ設立の提案＞
４：１５／１９９３年国連先住民族年における少数民族文化保護の問題
Ｅ．Ｔ．マキノ／ケー：伝南地方文化系
歴史文化遺産保護修復事業センター長

４：３０／ユーラシアンクラブ設立の意義と見通し
元郵政・ユーラシアンクラブ会長

D） 記者会見／５：００から５３０分（場所はシンポジウム会場で）
視察ツアー、今後検事会、シンポジウムを終えたその後の活動について

E） 設立記念式典／６：００から６３０分
＜記念ハ ア ＞
野村進・北海道ケクリ協会理事長
Ｅ．Ａ．ガイェル・世界少数民族協会議事務局長

F） 設立記念パーティー／６：３０－８：３０
６：３０／あいさつと乾杯
７：１０／無限放題
８：３０／閉会

＜＜ユーラシアンクラブへの参加希望＞＞

１／ 今後クラブの活動、事業に参加する希望がある ＹＥＳ ＮＯ

２／ 今後も資料請求、視察ツアーなどの案内を希望する ＹＥＳ ＮＯ

３／ ＹＥＳの方は、以下、ご記入のうえ、受付アンケート相に投函ください
氏名：
住所：
電話：
FAX：
所属／肩書：

４／ 会員募集、運営方法に関してご意見をお寄せください。

＜／＞

ボネさんのツンドラにクラブ設立

大野　遼

「ティートゥ」（野生のバラ）と呼ぶ、控えめな女性は二つの名前を持っていた。「職場ではエレーナ。家や友達にはアーラと呼ばれている。エレーナと呼ばれているのは義母も知らなかった。」本人は「もう慣れたけど」と笑っていた。

二つの名前は、１９５０年代からだという。チュクチの人々の発音が聞き取れなかった村の役人が勝手に決めたのがエレーナ。「父称」もこの時できた。私はアイヌの貝沢正さん（故人）から、全く同じことを聞いたことを思い出した。アムール流域のネギダール村ポリノオシペンコでも、スターリンの集住政策の後ロシア式改名が役人の都合で行なわれたと博物館長から聞いた。極東の全ての少数民族はこうした歴史を持っている。私は地名に大いに関心を持ったことがあり、「名前」が歴史を背負っていると理解している。人名も同じだ。〝変名〟も歴史になった。

ティートゥはツンドラ生まれ。地元の寄宿舎で義務教育を終えた。一年後念願の小学校の教員になれそうだという。現在は、朝７時から午後３時まで、人口千人のウスチベラヤ村の食器店で働いている。私の好みのタイプであった。彼女は３０ｋｍ離れたスネージジュヌイ村のアクティブな青年が気に入っているような印象を受けた。

チュクチの冬は夜が長い。朝太陽が顔を出すのは９時過ぎ、３時には沈む。明るくなるのを待っていたのでは仕事にならず、深夜にセブンイレブンに買い物に行き、散歩する感覚が必要とされる。村では室内は暖かい。しかし外の寒さは格別だ。生活のリズムをつかみ守ることが必要だ。多くの人々は状況を受け入れて生きている。

ある晩、ティートゥが義母、ボネさんと一緒にたずねて来た。ユーラシアンクラブに大いに期待をしているという。ボネさんは１９３９年にコルホーズができたこと、兄弟姉妹だけでなく貧しい人を助けながら、トナカイの牧畜が続けられてきたことを話し始めた。彼女はウスチベラヤに拠点を置く１０のグループ（ブリガードと呼ぶ）の第二ブリガードに所属し、普段は１２人（３家族、男６人、女５人、子供１人）でツンドラ暮らしを続ける。息子が凍死したのでやってきたのだった。原因はアルコールだった。冬の寒さはマイナス４５度になることも頻繁だ。厳しい生活条件に多くの若者がツンドラを去り、年寄りの多くは不安に思っているという。

私はボネさんに〝自分史〟を書いて送ってくれないかと頼んだ。チュクチの人々の暮らしと考え方をもっと知りたくなったからだ。二人は私に、トナカイの皮で作った毬をプレゼントしてくれた。

今回私は、この千人の村で昼夜にわたって約１０回程のミーティングを行ない、情報交換を活動の基礎とし、民族の文化と産業の発展を図ろうというクラブの趣旨を繰り返した。「我々は国家にだまされた」と話したトナカイソホーズの指導者、寄宿舎で若者にチュクチ語を教える女性、伝統工芸の職人など８人の若者と合意をし、この村にユーラシアンクラブが設立された。

【総括Ⅱ理解促進】
（民族誌映像を見る会、インターカレッジ文化講座ユーラシアンフォーラム等）に取り組んだ：参加者の知的好奇心に大いに答える活動だったが、少数民族を支援する活動参加にはつながらなかった。手間の割に成果のない理解促進活動を、五感を通してアジア理解につながる音楽を通した理解促進に切り替え、アジア・シルクロード音楽キャラバンやフェスティバルの実施をスタートした（1997年～）。

●　民族誌映像を見る会は、東京シネマ新社㈱の岡田一男氏からの申し出によって、上映会を呼びかけ実施していた。普段陽の目を見ることの少ない貴重な映像は、系統的な民族理解の手法として好評で継続された。クラブ履歴書では、1993年7月にスタートし、1996年3月まで、第1回目の映像タイトルが不明だが、30回を重ねた。岡田ご夫妻に感謝いたします。

１９９３年
　７月　民族誌映像を見る会スタート
　８月　民族誌映像を見る会「アイヌの熊祭りと他の民族の熊祭りを比較する」
　９月　民族誌映像を見る会「シベリアの少数民族のシャーマニズム」
　１０月　民族誌映像を見る会「ブリヤートの文化」
　１１月　民族誌映像を見る会「極東ロシアとサハリンの先住民族の歴史と現況」
　１２月　民族誌映像を見る会「フィン・ウゴル系の諸民族」
１９９４年
　２月　民族誌映像を見る会「エヴェンキ　タイガの遊牧民」
　３月　民族誌映像を見る会「サハの口琴」
　４月　民族誌映像を見る会「復元されたアイヌ映像」
　５月　民族誌映像を見る会「アラスカ　ユピック・エスキモー」
　６月　民族誌映像を見る会「チベット仏教　２つのモンラム祭」
　７月　民族誌映像を見る会「カザフスタン　復権するステップ遊牧僕文化」
　８月　民族誌映像を見る会「シベリアの極小諸民族」
　９月　民族誌映像を見る会「バルトの民族と英国の民族」
　１０月　民族誌映像を見る会「トゥーヴァ　チュルク民族とモンゴル文化の接点」
　１１月　民族誌映像を見る会「カナダ　イグルーリック・イヌイト」
　１２月　民族誌映像を見る会「舟 ①」
１９９５年
　１月　民族誌映像を見る会「サミ　過去と現在」
　３月　民族誌映像を見る会「サハの文化」
　５月　民族誌映像を見る会「タイミール半島の自然と人々」
　６月　民族誌映像を見る会「モンゴル人民共和国の時代の映像から」
　７月　民族誌映像を見る会「ツングースと呼ばれた人々」
　８月　民族誌映像を見る会「バイカル湖　シベリアの環境問題」
　９月　民族誌映像を見る会「ユーラシアの口琴を巡って」
　１０月　民族誌映像を見る会「ダゲスタンの人々と工芸」
　１１月　民族誌映像を見る会「カナダの先住民族問題を考える」
　１２月　民族誌映像を見る会「中央アジアの楽器と音楽」
１９９６年
　１月　民族誌映像を見る会「熊送りを巡って」
　２月　民族誌映像を見る会「中国の映像人類学」
　３月　民族誌映像を見る会「旧ソ連の異民族　コーリョーサラム」

●【理解促進のための活動】は民族誌映像を見る会と並行して、北方ユーラシア学会の研究者等の協力によって、北方ユーラシア学会による学術調査及びインターカレッジ文化講座ユーラシアンフォーラム、アイヌ文化フォーラム他の活動が、合計100回を超える催しとして実施された。文化講座のレベルは当時としては日本最高の水準にあった。

１９９３年
　６月　北方ユーラシア学会第１回例会（オブザーバー参加）
　９月　姉妹団体「北方ユーラシア学会」のペトログリフ調査協力
　　（ウスリー河、アムール河流域）
　１０月　　北方ユーラシア学会第２回例会（オブザーバー参加）
　　北方ユーラシア学会理事会にて、ユーラシアンクラブを姉妹団体と確認
　１２月　　北方ユーラシア学会第３回例会
１９９４年
　９月　姉妹団体北方ユーラシア学会、渤海遺跡調査
　１２月　北方ユーラシア学会の学術調査団と現地訪問協力（沿海地方）
１９９５年
　１月　北方ユーラシア学会、東大、一橋大、千葉大、早大、國学院大、
　　国士館大、創価大と協力、インターカレッジ文化教養講座計画確定
　２月　ウラジオストクの代理人とインターネット通信開始
　３月　第１回記念講演会「民族の共生、自然との共生」（早稲田大学国際会議場）
　　講師：田中克彦、大林太良、松本秀雄
　４月　インターカレッジ文化講座スタート（☆）（国立教育会館）社団法人東京倶楽部の助成決定
　　☆林俊雄、川又正智、佐々木史郎 …… ４月のテーマ「歩く」
　５月　☆加藤九祚、吉田集而、山田吾郎 …… ５月のテーマ「食べる」
　６月　☆伊東一郎、荻原真子、大林太良 …… ６月のテーマ「祀る」
　１０月　　後期講座スタート
　　☆加藤定子、矢島叡、村澤博人 …… １０月のテーマ「着る」
　１１月　　アイヌ文化フォーラム（１８、２５日）
　　☆浅川滋男、渡辺仁、大貫静夫 …… １１月のテーマ「住む」
　１２月　　アイヌ文化フォーラム（２～３日、山荘ポロチセ訪問）
　　☆風間伸次郎、中川裕、金子亨 …… １２月のテーマ「話す」
１９９６年
　３月　第２回記念講演会「民族の海：ユーラシアの喜びと悲しみ－１９世紀と２１世紀の間」
　　講師：加藤九祚、田村晃一、荻原真子
　４月　文化講座スタート 通年テーマ“民族の海”
　　☆加藤晋平、白井久也、中本信幸 …… ４月のテーマ「シベリアの真珠バイカル」
　５月　☆佐々木利和、小嶋芳孝、原暉之 …… ５月のテーマ「モンガボ・アムールの旅」
　　ツングース語講座（風間伸次郎講師）
　６月　キルギスタンの幹事（映画監督・カリジン・アクマタリエフ）招聘（国際交流基金）
　　☆高倉浩樹、藤代節、ニコライ・バラムィギン …… ６月のテーマ「大河回廊レナ」
　９月　北方ユーラシア学会の渤海遺跡調査協力
　１０月後期文化講座スタート　☆林俊雄、岡田英弘、小長谷有紀…… １０月のテーマ「ユーラシア１万キロ」
　１１月アイヌ文化フォーラム（高橋規講師）
　　騎馬民族誌映像を見る会（講師:林俊雄、工藤充）
　　☆本郷民男、小松久男、宇藤千枝子 …… １１月のテーマ「“神々”の交替」
　１２月　　☆金子亨、志茂碩敏、田中克彦 …… １２月のテーマ「草原の民－流転と興亡」
１９９７年
　４月　文化講座スタート 通年テーマ“ユーラシアの風”
　　☆赤澤猛、宝来聰、山口敏 …… ４月のテーマ「人類の形成」
　５月　☆井上紘一、金子亨、直川礼緒 …… ５月のテーマ「民族の形成」
　６月　☆谷本一之、藤井知昭 …… ６月のテーマ「芸能と音」
　　映画「大シルクロード」試写会（日本映画学校）
　７月　☆田中哲二講座　「中央アジアの親日国キルギス」
　９月　北方ユーラシア学会による渤海調査協力
　１０月　後期文化講座スタート　☆岡内三眞、藤本強、枡本哲 …… １０月のテーマ「歴史探訪」
　１１月　シンポジウム　「古代の海を渡ったユーラシアの風－現代の渤海船を派遣しよう」
　　☆橋守、石塚猛、池田憲彦 …… １１月のテーマ「自然との共生」
　１２月　　アイヌ文化フォーラム（アイヌ文化交流センター、高橋規講師）
　　☆安田憲彦、佐藤洋一郎、阪本寧男 …… １２月のテーマ「農耕の起源」
１９９８年
　４月　文化講座スタート 通年テーマ“国家、民族、宗教を超えて”
　　☆岩間典夫、辺真一、高橋義夫…… ４月のテーマ「民族と国家の狭間」
　５月　☆服部英二、杉山正明、坂本勉 …… ５月のテーマ「ユーラシアの潮流」
　６月　☆吉田世津子、山下宗久、小野智香子 …… ６月のテーマ「フィールドレポート」
　１０月　　後期文化講座スタート
　　☆森安孝夫、片山章雄、宇田川洋 …… １０月のテーマ「ユーラシアの古代文字」
　１１月　　☆林俊雄、吉田豊 …… １１月のテーマ「歴史を作った人々」
　　杉山正明講師分３月に延期
　１２月☆堀晄、大貫静夫、谷一尚 …… １２月のテーマ「フィールドレポート」
１９９９年
　３月　☆文化講座・杉山正明講師“マルコ・ポーロの謎”(98.11の振替)
　４月　文化講座スタート 通年テーマ“国家、民族、宗教を超えて”
　　☆岡田明憲、井本英一、前田耕作 …… 「ゾロアスター(教)の誕生と背景」
　　－前橋会場とＴＶ中継－
　５月　☆岡田明憲 …… ５月のテーマ「ゾロアスター教と世界宗教」
　６月　☆岡田明憲 …… ６月のテーマ「古代日本とゾロアスター教」
　１０月☆楠　賢道 …… １０月のテーマ「中国新疆ウイグル自治区の満州族“シボ族”」
　１１月☆ﾊﾞﾄﾞﾏ・ｱﾙﾙﾀﾉﾌ …… １１月のテーマ「ロシアのモンゴル国“カルムィック”」
　１２月☆松村一登 …… １２月のテーマ「ウラル系の少数民族マリ人」
　　武蔵大学公開講座“中央アジアの新視点－ウズベキスタン今と昔”に企画協力
２０００年
　１月　☆鈴木　董 … １月のテーマ「ユーラシア再発見･忘れられた超大国－オスマントルコ」
　２月　☆前田耕作 … ２月のテーマ「生活文化編・飛天の系譜－天使、ドラゴン、鹿、英雄」
　３月　☆加藤九祚 … ３月のテーマ「玄奘三蔵が訪れたカラテペ(ｳｽﾞﾍﾞｷｽﾀﾝ)発掘報告」

【支援協力促進】の活動
民族村自立支援　技術研修　販売　布地搬送　中古車　ＦＡＸ　青年教育支援　小学校文房具支援
シカチアリャン、キルギス、モンゴル
火災、病気、日本語教育、ホームステイ、

【理解促進】の活動　：民族誌映像を見る会
インターカレッジ文化講座　アイヌ文化フォーラム
民族料理を食べる会　写真展　講演会、シンポジウム
ユーラシアンフォーラム　留学生フォーラム・懇話会　ユーラシア言語文化塾　アジア・シルクロード音楽フェスティバル、ミュージックキャラバン

※姉妹団体「北方ユーラシア学会」のペトログリフ調査協力（ウスリー河、アムール河流域）
※大阪のアンコールワット拓本保存会の協力で拓本採取

【親睦促進】の活動　：　親睦旅行／沿海地方、アムール流域、中央アジア、　留学生送別会、海水浴、富士登山、忘年会、暑気払い、サッカー交流

新潟県小出郷文化会館で開催
ユーラシアコミュニケーションフェス

ロシア連邦北方先住民族協会
リーダーと懇談

↑は全国公文協と芸団協が開催した舞台芸術フェアでモンゴル、ウィグルなどの音楽をアピール。上はシルクロード倶楽部を運営された白石夫妻
↓はキルギス親睦旅行。髭の男性が「大シルクロード」の映画監督カリジン・アクマタリエフ氏

ユーラシアンクラブ創設の第二期（2000年～2007年）支部愛川サライ設置まで

２０００年
　１月　新年会
　　☆鈴木　董 … １月のテーマ「ユーラシア再発見･忘れられた超大国－オスマントルコ」

　２月　☆前田耕作 … ２月のテーマ「生活文化編・飛天の系譜－天使、ドラゴン、鹿、英雄」
　　小会議室開室(東京都渋谷区)
　３月　「チェチェン緊急報告会」制作協力（東京芸術劇場）
　　☆加藤九祚 … ３月のテーマ「玄奘三蔵が訪れたカラテペ(ｳｽﾞﾍﾞｷｽﾀﾝ)発掘報告」
　　言語文化塾開始：カタカナで学ぶモンゴル語(講師：アロハン)
　４月　親睦旅行（沿海州）
　５月　ユーラシア言語文化塾：ウイグル語、アゼルバイジャン語、ウズベク語
　　モンゴル子供発展センターに文具、教育機材寄贈
　７月　海水浴合宿(鎌倉)
　　モンゴル子供発展センターに寄付（文具および約７００ドル）
　８月　極東、中央アジア旅行
　１１月　留学生の門出を祝う会（留学生結婚祝賀パーティ）(東京芸術劇場)
　１２月　特定非営利活動法人ユーラシアンクラブ」認証
２００１年
　１月　親睦旅行（沿海地方）・クラブキャンプ施設改修準備視察
　　キルギス文化フォーラム（江東区文化センター）
　　口琴・ホーミー塾開催（01/1月～5回）
　３月　講演「現代のシルクロード：中央アジアユニオンの模索」(シェルゾド)
　　下町ユーラシア文化ルネッサンスプレフェスティバル開催（深川江戸資料館）
　　～「獅子幻想　暮らしに潜むシルクロード発見」
　４月　ウズベキスタン歴史文化体験旅行・テルメズ遺跡見学
　　アンサンブル“大地の響き”出張演奏（東京プリンスホテル、国技館他都内数箇所）
　5月　17日付で、シカチアリャンキャンプの登記簿完了（文化局→住民75人→裁判登記変更）
　７月　留学生懇話会（ウイグル、サハ）
　　留学生ＢＢＱ交流会（葛西臨海公園）
　８月　留学生懇話会（ウイグル、オイラートモンゴル）
　１０月　留学生懇話会（ウズベク、ジュンガルモンゴル、アゼルバイジャン、カラカラパク）
２００２年
　１月　極東視察、シカチアリャンコミュニティキャンプ合同委員会
　３月　「ユーラシア紛争地特別フォーラム」開催（早稲田大学小野講堂）
　　ウズベキスタンよりサシマコム招聘・公演（東京・埼玉・新潟にて４公演）
　４月　極東現地合同サポート委員会開催
　　ウズベキスタン親睦旅行
　　発掘調査（加藤九祚先生･ウズベキスタン）支援のベルトコンベア空輸
　６月　ユーラシア留学生フォーラム　（イラン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、パキスタン/駒込和裝学院）
　７月　アジア･シルクロード舞姫の競演（板橋区立文化会館）
　８月　親睦旅行（沿海地方）
　　２１世紀日ロ交流促進実行委員会発足
　９月　ウイグル旅行（ウルムチ、トルファン他）
　１０月　ウズベキスタンよりイスマトフ氏招聘、「音の回廊」公演（東京、神奈川、宮崎）
　１１月　フォーラムシリーズ21「ならず者国家とマスメディア報道」（益岡賢講師･於早稲田大学）
　１２月　留学生フォーラム「ウズベキスタン･カラカルパクの暮らしと文化」（東京芸術劇場会議室）　　12月22日、母幸子逝去
２００３年
　１月　新年総会
　　ハバロフスク、シカチアリャン、クラスニーヤル視察（民族芸能祭打合せ）
　　フォーラムシリーズ21「軍事ジャーナリストが見たユーラシア」（鍛冶俊樹講師、於早稲田大学）
　　6月7日、父親生逝去
　８月　２１世紀日本･ロシア交流促進フェスティバル（企画制作）（於ハバロフスク・シカチアリャン）
　９月　アジア・シルクロード音楽フェスティバル（宮城、宮崎）
　１０月　アジア・シルクロード音楽フェスティバル（岡崎・共催）
　　アジア・シルクロード音楽フェスティバル（東京）

２００４年
　２月　新春懇親会
　８月　極東親睦旅行、文具寄贈
　9月　「大地の学校」スタート。燃料電池プロジェクト
　１０月　アジア・シルクロード音楽フェスティバル企画制作（愛知、宮崎、福島）
　１１月　アジア・シルクロード音楽フェスティバル（東京）
２００５年
　１月　サハ共和国国立劇場主催公演制作依頼（大野総合プロデュース、クラブ協力）
　２月　新春懇親会、アジア・シルクロード音楽フェスティバル関係者会議
　３月　「キース・デビリエー太古の響き」彩の国さいたま芸術劇場公演　→
　７月　キルギス民族アンサンブル「オルドサフナ」日本公演
　１０月　アジア・シルクロード音楽フェスティバル（中央区・日本橋公会堂）
　１１月　愛川サライの設置決定
２００６年
　１月　アムール川汚染状況視察
　3月　キルギス共和国大使館文化アドバイザー就任
　6月　シカチアリャン自立支援チャリティコンサート
　7月　シカチアリャン自立プログラム合意NPO創設資金として20万円寄付
　　愛川サライ「大地のフォーラム730-06愛川」
　１１月　大野遼サハ共和国国民栄誉賞受賞・・・ＦＳＢがスパイ打診。大野強く拒絶
２００７年
　3月　アジアの瞳サマーキャンプ&フェスティバルの日時決定
　4月　日本橋祭りに参加　（ライハスロー、タラー、ジリンバヤラ、アブライティ、イダヤット、松本、石阪、伊良皆、キルギス大使館）
　5月　フェスティバル参加者募集　（共同通信、新潟日報、読売新聞、中央区民新聞掲載。ＮＨＫテレビ・ラジオで紹介）
　6月　日本橋三越劇場でアジアシルクロードフェスティバル　（名橋「日本橋」保存会共催、自転車振興会助成）
　7月　三越環境イベントに出演
　9月　キルギスでアジアの瞳サマーキャンプ&フェスティバル実施（日本から48人参加）・・・rロシア入国禁止が判明
　１１月　キルギス共和国大統領Ｋ．バキエフ大統領来日（外務大臣、イシククル州知事と懇談）
　１１月　愛川サライ収穫祭　キルギス音楽・カリマン・ウメトヴァエヴァコンサート

【小会議室の確保、そして特定非営利活動法人認証】

2000年に入り、新宿駅南口から徒歩3分、甲州街道沿いのビル中庭に立つプレハブ小屋がユーラシアンクラブの事務所となった。会議室を持たない時期は、池袋にある東京芸術劇場、喫茶店等に予約を入れて活動していた。いつでも面会し、会議ができる場所ができたことで活動は格段に進歩した。交通至便で訪れる人も多く、この会議室での各種講座、イベント立案の拠点として多くの事業が企画された。この年の12月には、1998年12月に施行された特定非営利活動法人促進法に基づく、特定非営利活動法人として認定され懸案だった公益法人となりました。

●ユーラシア言語文化熟のスタート

①カタカナで学ぶモンゴル語②ウイグル語③アゼルバイジャン語④ウズベク語⑤口琴・ホーミー塾⑥留学生懇話会（ウィグル、サハ）⑦留学生懇話会（ウィグル、オイラートモンゴル）⑧留学生懇話会（ウズベク、ジュンガルモンゴル、アゼルバイジャン、カラカラパク）⑨「大地の学校」（燃料電池プロジェクト）

●会議室から生まれた大型企画

①「チチェン緊急報告会」制作協力（東京芸術劇場）
②留学生の門出を祝う会（留学生結婚祝賀パーティ）東京芸術劇場
③キルギス文化フォーラム（江東区文化センター）
④講演「現代のシルクロード：中央アジアユニオンの模索」（シェルゾド）
⑤下町ユーラシア文化ルネッサンスプレフェスティバル開催（深川江戸資料館）～「獅子幻想　暮らしに潜むシルクロード発見」
⑥アンサンブル「大地の響き」出張演奏（東京プリンスホテル、国技館ほか都内数箇所）
⑦留学生BBQ交流会（葛西臨海公園）
⑧「ユーラシア紛争地特別フォーラム」開催（早稲田大学小野行動）
⑨ウズベキスタン・サシマコム招聘公演（東京、埼玉、新潟で4公演）
⑩発掘調査支援のベルトコンベア空輸（加藤九祚先生・ウズベキスタン）
⑪ユーラシア留学生フォーラム（イラン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、パキスタン駒込和装学院）
⑫アジア・シルクロード舞姫の競演（板橋区立文化会館）
⑬ウズベキスタンよりイスマトフ氏招聘、「音の回廊」公演（東京、神奈川、宮崎）
⑭フォーラムシリーズ21「ならず者国家とマスメディア報道」
⑮留学生フォーラム「ウズベキスタン・カラカルパクの暮らしと文化」（東京芸術劇場）
⑯フォーラムシリーズ「軍事ジャーナリストが見たユーラシア」（鍛冶俊樹、早稲田大学）
⑰21世紀日本・ロシア交流促進フェスティバル（企画制作）（ハバロフスク・シカチアリャン）
⑱アジア・シルクロード音楽フェスティバル（宮城、宮崎、岡崎、東京／2003）（愛知、宮崎、福島、東京／2004）（中央区日本橋公会堂／2005）
⑲サハ共和国国立劇場主催公演制作（大野遼総合プロデュース、ユーラシアンクラブ協力、文化庁後援）
「キース・デビリエー太古の響き」（彩の国さいたま芸術劇場公演）
⑳キルギス・民族アンサンブル「オルドサフナ」日本公演（すみだトリフォニーホール）

【キルギスプロジェクト】

①2005年7月、キルギス民族アンサンブル「オルドサフナ」招へい公演（すみだトリフォニーホール）
※要請を受けて、キルギス共和国のためのグランドデザイン「アジアの瞳」完成・大使館に提供。ダスタン・サリグロフ氏からグランドデザイン賞賛の手紙受領。「アジアの瞳」がキルギス国内でキルギスのキャッチコピーととして語られることもある。
②2006年3月、キルギス共和国大使館文化アドバイザー就任
③2007年3月、アジアの瞳サマーキャンプ＆フェスティバルの日時決定
④　4月、日本橋祭りに参加
⑤　5月、フェスティバル参加者募集
（共同通信、新潟日報、読売新聞、中央区民新聞掲載。ＮＨＫテレビ・ラジオで紹介）
⑥　6月、日本橋三越劇場でアジア・シルクロードフェスティバル
（名橋日本橋保存会共催、自転車振興会助成）
⑦　7月、三越環境イベントに出演
⑧　9月、キルギスでアジアの瞳サマーキャンプ＆フェスティバル実施（日本から48人参加）
―ロシアへの入国禁止が判明
⑨　11月、キルギス共和国大統領Ｋ．バキエフ氏来日
⑩　キルギス共和国大使館が大野遼に感謝状

【親睦旅行等】

2000年4月、沿海地方親睦旅行
5月、7月、モンゴル子ども発展センターに寄付
7月、留学生海水浴合宿（鎌倉）
8月、極東、中央アジア親睦旅行
2001年1月、沿海地方親睦旅行・クラブキャンプ施設改修準備視察
4月、ウズベキスタン歴史文化体験旅行・テルメズ遺跡見学
5月、17日付でシカチアリャンキャンプ登記簿完了（文化局→住民75人→裁判登記変更
2002年1月、極東視察、シカチアリャンコミュニティキャンプ合同委員会
4月、極東現地合同サポート委員会開催
ウズベキスタン親睦旅行
8月、沿海地方親睦旅行　21世紀日露交流促進実行委員会発足
9月、ウィグル旅行（ウルムチ、トルファン、クチャ、カシュガル）
2003年1月、ハバロフスク、シカチアリャン、クラスニーヤル視察（民族芸能祭打ち合せ）
8月、２１世紀日本･ロシア交流促進フェスティバル（企画制作）（於ハバロフスク・シカチアリャン）
2004年8月、極東親睦旅行、文具寄贈
2006年1月、アムール川汚染状況視察
6月、シカチアリャン自立支援チャリティコンサート
7月、シカチアリャン自立プログラム合意NPO創設資金として20万円寄付。
11月、大野遼サハ共和国国民栄誉賞受賞　　－ＦＳＢがスパイ打診。強く拒絶
2007年5月、　　－大野遼ロシア入国禁止決定
9月、　　－キルギスフェス入国時に「禁止」が判明

【支部愛川サライ設置】

2005年4月、神奈川県平塚市から神奈川県愛甲郡愛川町に転居
12月、支部愛川サライ設置決定
2006年7月、愛川サライ「大地のフォーラム」
2007年11月、愛川サライ収穫祭、キルギスの音楽　カリマン・ウメトヴァエヴァ
12月、アジアシルクロードアンテナショップ・チャイハナ「愛川サライ」（支部事務局）オープン

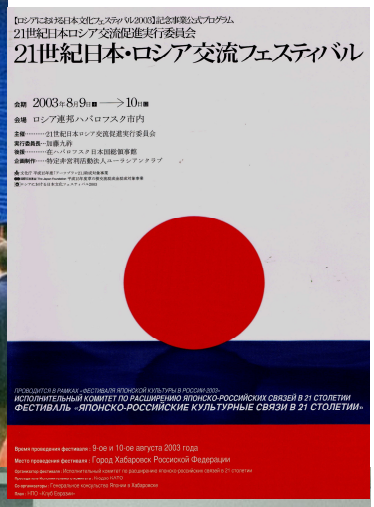
【シカチアリャン村支援ロシアでの活動挫折】

一方、不正常な管理で活動が停滞していたシカチアリャン村のキャンプの運営については、住民側からキャンプの登記の移転訴訟が起こされて、三年越しの審理の末に、購入資金の提供者である大野遼に所有権を移転するとの決定が出され、2001年5月17日付で登記が完了した。これによって大野が管理、税の支払いを行うことになったが、住民側の運営、管理の体制は整わず、村役場や住民と使用方法について協議した結果、2006年７月、「積極的観光振興」「大豆栽培」「青年技術研修」などを内容とするシカチアリャン村自立プログラムで合意、これから本格的に取り組もうとしていた矢先、テレビ局の取材の申し入れがあり、同行したところテレビ局側はヘリでの取材許可を取らずにチャーターし治安機関の捜査を受けることになった。私は同乗したことを咎められることはなかったが、12月ハバロフスクを別件で訪ねた際に、治安機関の職員から自民党総裁選挙や海上保安庁の動向について情報提供を求められた。これを強く拒絶したところ、翌2007年9月、キルギスを訪れた際に、治安機関から危険人物リストに載せられて、ロシア連邦への入国拒否者扱いとなっていることが判明した。まったくうかつな行動だったと反省しているが既に遅く、ロシアでの活動が不可能となった。表向きの入国禁止理由は「少数民族の自立支援」のようだが、「政治的自立支援」ではなく、ハバロフスク地方政府の知事が「日ロ交流の成果」と賛同した「経済的自立の支援」であり問題はない。ＦＳＢが要請した情報提供を拒否したことへの見せしめと受け止めている。以来7年余りを経過することになったが、日本国内での活動を模索することになった。

2006年7月には村の自立とキャンプ運営に携わるＮＰＯ創設資金として20万円をニーナ村長に手渡した。その後自立プログラムの拠点として運用して欲しいと、ハバロフスクの日本領事館を通して、キャンプの村役場への提供を申し出たが、ニーナ村長はこれを「キャンプの使用制限は受けたくない」と拒否した。理解不能の状態にある。

一方、この間、発病した家族のフォローのため自宅の転居が続き、現在の神奈川県愛甲郡愛川町に移転した2005年の暮れ12月、支部愛川サライの開設を決め、地域での活動を始めることになった。

ユーラシアンクラブの活動の在り方も見直す議論を初め、大野遼中心の「大野クラブ」といった評価の脱却、日本人だけでユーラシアを語る「日本人クラブ」の脱皮、砂漠に水を撒くような各地でのイベントを見直す「地域拠点型」活動への転換、人と文化の交流の前提となる「情報の発信・通信」活動の拡充―などを提起した。



加藤九祚先生が発掘した中央アジア最大の仏教伽藍遺跡→↓
ウズベキスタン共和国テルメズ市カラテパ遺跡

ロシア・アムール少数民族村自立支援チャリテイ・コンサート

アムールに届け、支援のミュージックキャラバン

アムール河汚染による危機から脱却をめざす、シカチアリャン村（ナナイ族）を支援しよう

中国吉林省化学工場爆発流れ出した有物質・ニトロンゼンは、松江を経てアムルに流れ込み、ハバロフスク郊にあって、ムールの漁労頼って暮らす、ナナイ族シカアリャン村の人々を存亡の危機に立たせています。

3月、『漁労禁止』が解除されましたが、毒物が基準値をクリアしただけで、河の汚染は全く解決されず、せっかく獲れた魚も汚染による健康不安で売れず、暮らしは成り立ちません。

村では漁労に頼らない暮らしを作ろうと、13,000年前のペトログリフ（岩絵）観光を中心に、お土産品などの製作販売で活路を模索しています。とはいえ、人口300人の寒村には蓄積もとぼしく、外部からの支援が求められています。

本コンサートは、収益金を村に寄付し、自立の一助にするために行うものです。皆さまのご参加とお力添えをお待ち申し上げます。当日、在日ナナイ人による訴えを予定しています。

「自立支援・理解・親睦・協力促進―アムール・沿海州エコカルチャーツアー」募集中

シカチアリャン村やビキン川流域などロシア極東地域の先住民族村訪問：旅行時期 2006年7月14日～21日の8日間　旅行費用：215,000円

【写真】民族衣装を着たシカチアリャン村の子どもたち

宮崎県門川町で10年以上続いた交流

アムール汚染に勝て！ナナイの 300 人の仲間たち

ナナイ族の危機を救い、自立の努力を支えようと
イラン、ウイグル、内モンゴル、ネパールそして日本アジアの豪華一級のアーチストが熱演します

ライ・ハスロー（馬頭琴演奏家、作曲家　中国・内モンゴル）
1958 年、中国･内モンゴルフルンベール盟出身。1980 年、北京中央民族歌舞団の招聘で、同歌舞団へ入団。1982 年、中国・全国民族楽器コンクールで第 1 位入賞。特に 1991 年、モンゴル人民共和国（現モンゴル国）での演奏は多くの人に感動を与え、馬頭琴奏者としては初めて文化芸術賞を授与された。1995 年中国国家一級演奏家の称号を授与された。1999 年来日後は各地での演奏活動はもとより、2003 年、「姫神」とのコラボレーションでＣＤ「青い花」のレコーディングやコンサートに参加するなど、活躍の場を広げている。

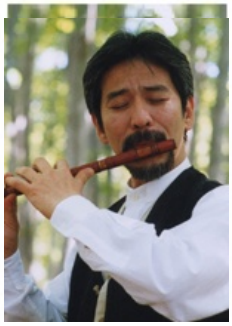
パンチャ・ラマ（パンスリ（笛）演奏家　ネパール）
「パンスリ（横笛）の天才」と称され、ネパールを代表するミュージシャン。ネパール東部、インドの国境に近いサララヒ生まれ。テレビ、ラジオ、ドラマで数千曲に及ぶ演奏やレコーディング。1994 年来日、95 年、大阪花博出演を機に日本での作曲、編曲、演奏活動に入り、「ヤタラ」、「プレイ」などCDをリリース、ファンを集めている・96 年『チョウタリ・バンド』（ネパール人と日本の混合バンド）を結成。1st アルバムCD『チョウタリ』は、今なお、ネパールの人々に愛されている。02 年さだ　まさしのＣＤに参加。2005 年 12 月でデビュー20 周年を迎えた。

シャーサーバリー・ハミド（サントゥール、ネイ（笛）演奏家　イラン）
1961 年生まれ。イラン、テヘラン出身、44 歳。ヴォーカル、サントゥール（ピアノの原型である弦楽器）、タール&セタール（弦楽器/日本の三味線に類似）ネイ（日本の尺八に類似）、ダフ（指先で打つ太鼓）等、幾つもの楽器を一人で演奏することでも有名。2005 年 8 月 17 日イランVS 日本サッカー・ワールドカップ予選でイラン国歌を歌った。日本国家の独唱はさだ　まさし。
数年前から、ライフワークの一環として、日本の小学校や保育園等を回り音楽を通して国際交流を行っている。

梅木秀徳（ホーミー、口琴演奏家　日本）
1977 年、岩手県生まれ。モンゴルのホーミー指導の第一人者バータル・オドスーレン氏に素質を認められ、師事し、同氏の熱心な指導の下、訓練を重ね、ホーミーを修得。モンゴルホーミー協会よりプロフェッショナル・ホーミー歌手の認定。2003 年 9 月、西モンゴル、ホブド県で開催されたホーミー・フェスティバル（コンテスト）で特別賞を受賞。2001 年にはモンゴルの北西隣シベリアのロシア連邦トゥバ共和国に渡り、当地の喉歌のスタイル、ホーメイを学ぶ。現在もモンゴルへ旅をしながら、ホーミー、馬頭琴の奏者として全国的に演奏活動を展開中。

タラー（中国古箏演奏家、中国・内モンゴル）内モンゴルフフホト市生まれ。モンゴル民謡歌手の母の影響で、13 歳で琴を習い始める。1992 年内モンゴル芸術専門学校音楽科を卒業し、内モンゴル歌舞団で活躍。表現力ある演奏で高い評価を受ける。力強い、色彩感のある演奏で定評がある。

アブライティ（タンブル演奏家、中国・新疆ウイグル）タンブル、ドタール、ラワップ等民族楽器のほかアコーデオン演奏家。1978 年、古代「西域」といわれた新疆ウイグル自治区アクス町で生まれ、4 年半音楽教諭をしていた。2001 年 4 月来日。50 曲以上の演奏が可能。す多彩なエンタティナー。



山口　幹文（やまぐち・もとふみ　鼓童　日本）
1954 年、茨城県生まれ。1980 年当時の鬼太鼓座に入座、笛を独学にて習得。以来、鼓童のプレイヤーとして、笛・胡弓・箏・三味線などを務める。現在は、鼓童の舞台演出や作曲を担当している。鼓童の国内外の公演ツアーに参加するかたわら「一管風月」というタイトルでのソロコンサートも行なっている。

・・・

アムール河のニトロベンゼン汚染による民族の危機をどう乗り切るか

先住民族ナナイの村・シカチアリャン住民の声　ビクトリア・ドンカン　翻訳：大野　遼

「アムール川の環境汚染によって、村の先住民の雇用問題が引き起こされました。川の水は、有毒な化合物に汚染され、魚を獲ることも、食べることもできなくなってしまった。こんな状態で、どうやって生きていけるのか、家族を養っていくために、何をしたらよいのか。この問題について私は、シカチアリャンの住民に聞いてみました。」
（シカチアリャン在住：ビクトリア・ドンカン）

パッサール・アレクサンドル　無職　子ども2人　28歳

「かつては魚を獲り、売って、家族を養うことができた。妻は保育所で働き、最低生活費の半分ほどを稼いでいる。現在、最低生活費は、一人当たり平均4,280ルーブルだ。仕事を見つけなくてはならない。給与は、生活維持できる状態ではない。村には仕事がない。家に居て、日本人が援助してくれるのを待つのは、恥ずかしいだけだ。村には仕事が必要だ」

スースロフ・セルゲイ・アルテミェビッチ　漁師　建築技術者　46歳

「魚を獲ってはいけない。健康が第一だから。人がまともに生きていくには、仕事が必要だ。収入がなくなったら、家族を養えなくなる」

スースロフ・セルゲイ・イグナトビッチ　漁師

「漁労はしない。しかし、人によっては魚を獲り続け、食べるだろう。なぜならそれが、この村の暮らしだし、魚がなくては生きていけないからだ。別の仕事を探さないといけないと思う。今、伝統的木工技術を学んでいる。観光客へのお土産として売りたい」

アクタンカ・ウラジーミル・ウラジーミロビッチ　漁師 46歳

「村に仕事はない。生活保護で暮らしているが、生活費はいつも足りない。魚を獲っても、売らない。現状では、誰も買ってくれない。一箇所に留まっていない魚を獲る。そんな魚はいい。煮たり、焼いたり、ハンバーグにする。とにかく、何か食わなくては生きられない。仕事があれば、もちろん仕事をしたい」

アクタンカ・ウラジーミル・ニコラエビッチ　年金生活者　身障者(2度)　40歳

「かつては漁民から、安く魚を買い上げた。都会に出かけて、市場で売った。これで食料、衣服、テレビさえ買っていた。年金は足りない。妻は無職。仕事はどこにもない。今、妻と一緒に教室に通い、木工、白樺の網細工を学んでいる。お土産品作りを学び、夏には観光客に売って、パンを買えるようにしたい」

オネンコ・スベトラーナ・ドゥミトリエブナ　年金生活者　守衛　65歳

「昔は町に出かけ、魚を売った。息子はほとんど毎日、魚を獲っていた。年金はわずかで、最低の生活費にも足りない。私は孫を愛している。誕生日にはプレゼントをあげたいが、お金が足りない。きれいなナナイの上靴を縫って、夏には観光客に売ります」

ペルメンコ・タチヤナ・ボリソーブナ　女性漁師　43歳

「いつも魚を獲っていた。魚がなくては生きていけない。だから今も魚を獲って、食事を作っています。仕事さえあれば、仕事をしたい。支援はありがたいが」

キレ・エレーナ・アレクサンドローブナ　教諭　装飾工芸教室を運営　56歳

「白樺加工、ツルやザルヤナギの根を使った網細工を、無料で教えている。こうした知識が、暮らしを支える仕事になると思う。村民が仕事をして収入を得られるお土産の製作工房を、開設できたらいい」

チピズボーヴァ・リュボービ・ゲンナジェブナ　看護士　子ども3人　36歳

「収入の良い仕事があれば、今、村民は魚を獲って食べるなんてことはしない。でもきっと、誰かが魚を獲って食べ、そして悔やむことになる。病気になるのは、わかっているのに」

ニコラエヴァ・アーシャ・セメノーブナ　教諭　40歳

「みんなで、環境汚染についての日本の提案について、話し合いました。そして決意しました。仕事場を開設することが良い。村民が自分で稼ぎ、決して、ぼやっと座って、誰かが養ってくれるのを待つということをしてはいけない。村の全ての家屋は古くて、ほとんど壊れそうだ。それでも仕事のない大工がいる。家族を残してどこかに行くなんて、できない。特に冬は、大変つらい家事がある。薪割り、水汲みとか。作業班が組織されて、新しい家を建てることができればいい。頻繁に外国の観光客がやってくるのに、村は老朽化したままだ」

ドゥルジニーナ・ニーナ・イグナチェブナ　村長

「役場は、上水、文化遺産の保護、観光、お土産品の加工などを運営する村営の企業をつくります。これまで、魚を獲ることしか知らなかった貧しい村民に、仕事を確保するため努力したい。シカチアリャンの文化遺産ペトログリフ（岩絵）を保存するための、仕事場を開設することを考えています」

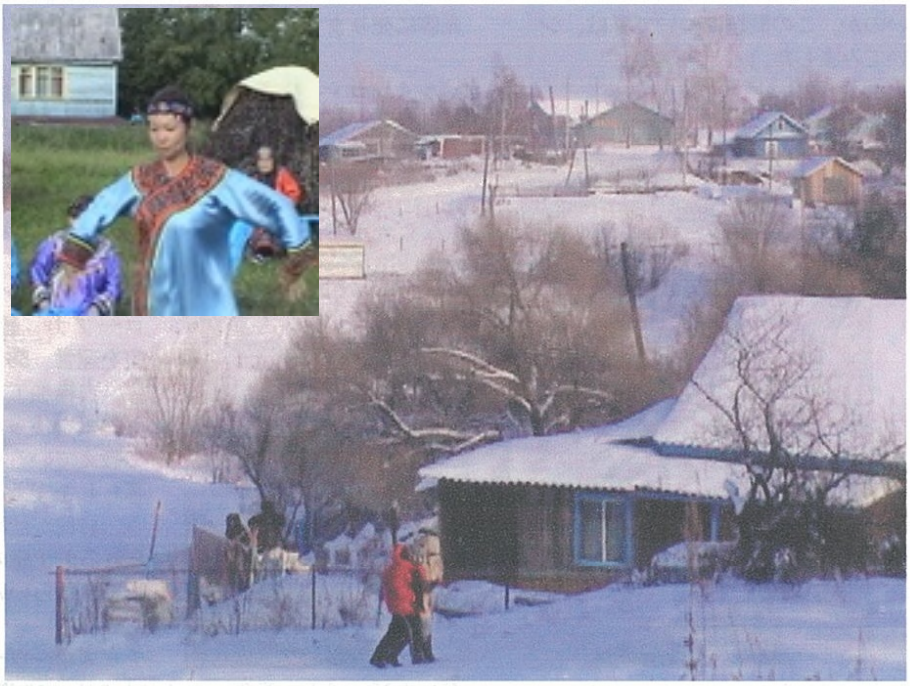
アジャール・リマ・デニソーブナ　協同組合<ナニ>代表　子ども8人　50歳

「協同組合は、これまで魚を獲って塩漬けにしたり、イクラを加工したりしてきた。これからは、新しい収入源になる仕事を探そうと思っています。薪作りのための仕事を、検討し始めました」

【写真】ペトログリフのひとつ　撮影：河野真一

漁労に生きる先住民族の村　シカチアリャン　　大野　遼

シカチアリャン村はハバロフスク地方ハバロフスク地区にあり、ハバロフスク市から80キロメートルの所に位置している。この村は民族村で、325人の住民のうち90%はナナイ人（アムール流域で人口1万1千人）、残り10%がロシア人、ウクライナ人、タタール人です。



オホーツク海の流氷は、凍結したアムール河から発し、北海道や朝鮮半島に達したものであることは有名ですが、日本列島の人や文化の起源も、アムール流域から上流のバイカル湖に淵源をたどれるものであるとの「バイカル起源論」も注目される学説として認められており、ナナイは日本人と文化にかかわり深い先住少数民族の一つです。

言語も日本語によく似ています。村の子供たちが歌うフレーズでは、アムールの魚が、“尾をフルフル”して、“餌をパクパククウ”などの日本語と同じ擬態表現も見られます。アムール河上流の中国の少数民族ホジェンはもともと同一の民族で、1860年の北京条約でウスリー川を東西の境として中ロの国境が確定されたために民族分断され今日に至っています。

ハバロフスクの都市拡大、ロシア人の居住区の拡大に伴って、先住民族の生活範囲も狭められ、もともとの産業基盤であったアムール河も漁労件を狭められる形で、年々先住民族の命運が細くなっています。これまでも漁獲高の減少は死活問題になっており、中国石油化学工場のニトロベンゼン流出はこうした状況に追い討ちをかけた形です。

村にはアムール河の岸辺に沿って、紀元前1万3千年に遡る古代の住居址、百数十点に上るペトログリフと呼ばれる古代の遺跡、岩絵が存在し、日本の縄文文化とのかかわりも指摘されています。

村はアムール河右岸に位置し、周囲を島や入り組んだ支流に囲まれており、地勢は丘陵が多い。気候はモンスーン型気候で、雨の多い暑い夏と、寒くて雪の少ない冬が特徴で、夏の最高気温は32℃、冬の最低気温は-36℃に達すします。村は混合林に囲まれており、カラマツなどの針葉樹が群生しており、多くの価値ある樹種に恵まれ、森にはイチゴ、キノコ、薬草などが生育しています。

村には産業といえるものはなく、第一の生業は漁業、そして狩猟、イチゴやキノコの採取などで生計をたてています。その他民族工芸品、伝統的民族服や靴などの土産品をつくっています。現在村には昨年完成した新しい小学校、幼稚園、文化会館、のほか雑貨店は一つだけあります。

ユーラシアンクラブは、シカチアリャン村で、ナナイの伝統的装飾を生かした縫製産業育成のため協力を続け、村のクラブキャンプの一棟を縫製工場に改築改修し、日本から送られたミシン、布地を利用した小物生産が始まっています。数年前、現在の村長を初め、村の3人の女性が富山県の東林勉さんが経営するミシン工場に研修のため招かれ、また4人の専門家が村に派遣され、製品がクラブや協力ボランティア団体を通して日本で頒布、村人に還元する活動も数年続けられました。姉妹村のパートナー自治体を探しています。

キャンプは大野が資金を提供し、村民77人に分筆して所有。ユーラシアンクラブが補修費用の一部を協力、村のユーラシアンクラブ会員が運営しています。キャンプは1.5ｈａ。建物は老朽化しており、村人が無償で補修しながら活用しています。これまで極東少数民族の芸能交流の拠点となるなど活用されています。敷地内ではテント設営やバーベキューを楽しむなど交流スペースを広くとれます。村民は、このキャンプを観光収入や村の自立のための活路の一つとして期待しており、村民がナナイの伝統的半地下式住居復元を検討しているほか、20万円程度で完成する4メートル四方の山小屋のドナーを募っています。

【シカチャリアン生活維持と自立支援（仮称）募金】送付先
郵便口座名：ユーラシアンクラブ　口座番号：00190-7-87777
通信欄にシカチャリアン支援と明記してご送付下さい。
皆さまのご理解とご支援をお願い申し上げます。

【写真】上：1月厳寒のシカチアリャン村　下：村のおばちゃんと抱き合う大野さん　撮影：河野真一

特集：シカチアリャン村

○　「シカチアリャン通信」　大河アムールに暮らす　　シカチアリャン村村長　ニーナ　ドゥルジニーナ

私たちはナナイ人。川幅５キロにも及ぶ雄大なアムール川の岸辺に暮らす，極東ロシアの先住民族です。私が村長を勤める村の名前は「シカチ・アリャン村」(以下シカチアリャン村)。ロシア極東の行政区ハバロフスク地方ハバロフスク区に属し，新潟から航空機が着陸するハバロフスク市の東方，アムール右岸沿いに舗装道路を 70 キロ下り，アムール川に向かって森の中を 30 分ほど車で走りぬけると到着します。眼前に大河が広がり，岸辺の丘陵に村民の家が転々と連なっているのどかな村です。ロシア政府の先住民族村への援助で，小学校，保育園，文化館，博物館，そして村役場が同居する真新しい建物が数年前に完成し，300 人の村の教育，交流，そして行政の拠点となっています。

村の歴史は新石器時代に遡ります。ロシアの考古学者の発掘調査によって村の一角にある，アムール川に臨む丘陵の上で，1 万 2 千年前に遡る住居跡が発見され，日本の縄文時代とも関係がありそうだと話題になりました。シカチアリャン村は，古代から存続しているナナイ人のふるさとです。ナナイの人々は，この村を拠点に今でも狩猟や漁労にかかわり生活しています。近年になって，猟師や漁民は「ナニ」「ソロディチ」と呼ぶ先住住民族のための企業体を設立して仕事をするようになりました。

シカチアリャン村には，フランス、ドイツ、アメリカ，そして日本からと，毎年，世界中から観光客が訪れています。観光客が興味を持つ最大のお目当ては，文化遺産「シカチアリャンの岩絵」です。ガーシャの古代住居跡からシカチアリャン村の集落北側に広がるアムール川の岸辺に巨大な火山岩が集積しており，この岩を刻んだり，擦ったりして描いた鹿や馬などの動物や日本の歌舞伎役者の顔のような絵やサルのような顔の絵が転々とつながっています。まるで「自然の画廊」のようです。昔ロシアの考古学者が数えたときには百数十点もあったのですが，毎年凍結したり，増水したりを繰返すアムール川の流れの力で，移動したり，風化したりしていますが，新しい絵が見つかることもあります。

「シカチアリャンの世界」という名前の村の博物館には，アムール川とともに暮らした昔のナナイ人の暮らしや今に伝わる「生命樹」を説明するミニチュアの復元模型，絵，考古資料それに岩絵の実物大模型など興味深い展示に驚かれると思います。博物館には専門家も常駐しており，質問に答えていただけます。村には，「アイオガ」，「アイシマ」，「ビアルタン」と呼ぶ，伝統文化を継承し，歌や踊りを紹介する民族アンサンブルが３団体あり，コンサートプログラムを用意しています。

毎年７月から９月にかけて，ナナイの伝統的なスポーツや、民族料理の出来具合を競ったり，「イリイチイ」，「ウンディ」という伝統的な清めやシャーマンの儀式に，村の住民とお客さんが一緒に参加して交流します。このフェスティバルの開催中，村の手作り職人による民芸品の展示会や見本市も行われます。

現在，ユーラシアンクラブと協力して，シカチアリャン村出身の才能ある若者に，日本語や積極的な観光の進め方，養殖漁業の技術研修などを行う青年育成プロジェクトに取り組んだり，数年後にシカチアリャン村の岩絵を中心とした「300 人の村ーシカチアリャンの岩絵展」も計画中です。日本の皆様と協力して活気ある村づくりを進めたいと思います。

シカチアリャン村の発展のため日本での研修を望む若者、アクタンコ　ナターリャ　さん（女性）

1982 年 9 月生まれ。ワニノ区ケナダ村中等学校卒業後，2004 年，ハバロフスク国立教育大学芸術グラフィック学科卒業。装飾工芸芸術および伝統産業教諭。2004 年 - 2005 年ワニノ区ウスチ・オロチ村寄宿学校で美術教諭と補修教師。2006 年 - 2007 年ゴロデェコヴァ名郷土博物館ハバロフスク自治区シカチアリャン村支所主任学芸員 2008 年―2009 年市町村児童教育施設シカチアリャン村保育園保母。2008 年 - 現在ネクラソフカ村民族工芸館教師。2009 年 9 月 - 現在ハバロフスク市文化局研究教育創造文化協会　美術部門専門家。住所：シカチアリャン

観光文化で自立する夢

「シカチアリャンという村の名前は 1935 年頃から記録にあるが，今村民は愛称で「アリャン」と呼んでいる。この村には昔から才能豊かな人が多かった。1937 年のパリの世界万国博覧会でグランプリを受賞した美術工芸品を作成したのは村の女流画家，マイリ　アクタンコだった。現在村には外国の権威ある画廊やハバロフスクの博物館で注目されているキャンバス画のイリヤ　リハノフが住んでいる。村の眼前に広がるアムール川は芸術家や詩人の心を刺激するようです。1967 年から 1990 年にかけて村には「アムール装飾」呼ばれた工房があって，たくさんの女性が伝統的デザインを活かした縫製靴を作って働いた。このような工房を村に再生できれば，村が現在抱える失業問題の解決に役立つと思う。そして村の職人の技能は新しい工房で役立つはず。現在，村民の多くは自宅で，伝統的刺繍、木工芸，魚皮や獣皮工芸のお土産を製作して頑張っている。シカチアリャンは，12000 年前に遡る古代の岩絵―ペトログリフという―があるユニークな場所に位置しているが岩絵は現在保存が必

要な状態だ。自然や時間の経過、人間がもたらした変化で，しばしば悲観的に語られるが，何とかできないわけでもない。私は，一種の文化財保護区の創設，ペトログリフ見学者の管理が岩絵を多くのマイナス作用から防ぐと思う。そして，祖先の神話と伝説で育った村民なら岩絵についてたっぷりと生き生きと語れない人はいないのです」（アクタンコさん）

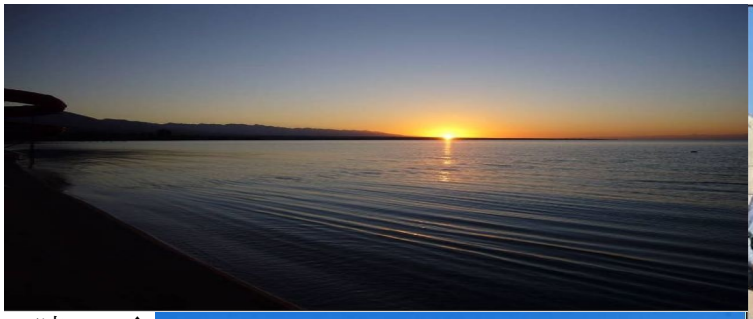
２００７年６月２９日
日本橋・三越劇場

日本自転車振興会
競輪補助事業

キルギスー日本橋シルクロードブリッジ
アジア・シルクロードフェスティバル

ーキルギスプロジェクト（2005年～2007年）ー

①グランドデザイン「アジアの瞳」を提案
②三越劇場での公演・映画祭、
③キルギスでフェスティバル、日本から48人が参加、
リニューアルエネルギーのシンポジウムを行いました



↑イシククル湖の日の出→↓「アジアの瞳サマーフェス」

КЫРГЫЗ РЕСПУБЛИКАСЫНЫН ЖАПОНИЯДАГЫ ЭЛЧИЛИГИ
在日本国キルギス共和国大使館
EMBASSY OF THE KYRGYZ REPUBLIC TO JAPAN

No. 27.05.2006

CERTIFICATE

This is to certify that Mr. Ryo Ohno is Adviser of the Embassy of the Kyrgyz Republic to Japan for promoting Kyrgyz-Japanese Cultural Co-operation during the period of 2006-2007 years.

Askar Kutanov,
Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary
of the Kyrgyz Republic to Japan

The Embassy of the Kyrgyz Republic to Japan

Certificate of Honour

The Embassy of the Kyrgyz Republic to Japan
honestly offers it gratitude and honour to

Mr. Ryo Ono

in recognition of your achievement
and contribution to Kyrgyz-Japan relations

On the Sixth day of January in the year Two Thousand Six,

Ambassador
Dr. Askar Kutanov